
剣盗りモノガタリ

松下星哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣盗りモノガタリ

【NZコード】

N1121Y

【作者名】

松下星哉

【あらすじ】

とある国の一人の少年が様々な国を旅しながら妖魔やモンスター、剣の使い手等と闘い、色んな出会い、そして人として剣士として成長していく剣の物語。

バトル、ラブコメ要素ありな昔風の印象を与えつつ、実は未来の話。

第1話～序章～（前書き）

とつあえず、不慣れなので見づらいかもしだせんが、ご容赦下さい。

第1話／序章

プロローグ

・・・その日、山向こうの夜空が煌めき、大気が震えた。
家の外では村人たちが何事かと、騒いでいた。今日は祭りで特に人出が多い。

「何だ、何だ今の音は」

「一瞬光つたぞ」

「何もこんな日出度い日に・・・」

俺、トウヤ・ヒノカは家の外から聞こえてくるそんな話し声を聞きながら、そつとため息を吐き、目の前の人物へ話しかけた。

「親父、外が何やら騒がしいが様子を見に行かなくていいのか？」

おれが自分の父親である目の前の人、タチオ・ヒノカにそう言ったのには二つ理由がある。

一つは、俺の親父はこの村で村長に次ぎ一番目にお偉いさんだということ、もう一つは俺自身外に出たいということ。なのだが・・・
「心配は要らん。話し声を聞く限りでは、このあたりには被害もなさそうだし、余程大事になれば村長が出張つてくるだろう。それよりも今は儀式を終わらせるほうが先決だ。」

・・・これである。ちなみにこの儀式げんじというのは、この村の古くからしきたりで、15歳になると元服げんぶくを迎えた、つまり一人前の人として認めるために、様々な儀式、説明等が行われる。
まあ、それに伴い色々な権利、例えば剣を持つようになつたり村

の外へ出れるようになつたり、だとか。よつやく旅に出たるなあ・

・

「つまり、そのことを踏まえていれば、これひとつかも・・・
トウヤツー聞いてるか!?

「モ、モチロン」

聞いてませんでした。

「ふう。お前とこいつやつは・・・まあ、いい。儀式は終わりだ。ど
うせお前のことだ、最後まで真面目に聞くとは思つてない。」

と親父殿は苦笑しながら、

「明日には旅立つんだから帰つてこいんだから今日は
せつかぐの祭りだし楽しんでこー」

と話が分かることを言い出した。

「ああ、あつがとう親父。・・・父上。行つてきます。」

俺は立ち上がると、親父に一礼し、外へ飛び出した。

暦255年、7大陸から成る、とある国のある村の一室より物語
は始まる・・・話は12年前に遡る。

～暦243年～

空は澄み小鳥のさえずりが聞こえる、そんな爽やかな朝だった。そ

の空の下にある屋敷の庭先で・・・

「えいっ！ やあっ！ とう！」

朝の静寂を打ち破るように一人の少年がそんな気合とともに木剣を振り回していた。軽くよろけながら。

「トウヤ、剣は力任せに降つてもダメだぞ。それに剣に振り回されすぎてるな」

と、たしなめる声が少年の傍から聞こえた。

それは、黒髪を短髪に揃え身の丈180?へ僅かに届かない筋肉隆々な青年だったが、その少年を見守る黒い瞳の眼差しはとても温かなものだった。

「むう。でも、このけんがおもたくてむずかしいよ、とうちゃん」

と、トウヤと呼ばれたこれも黒髪黒瞳の少年は口を尖らせて抗議する。

「はは、そうだな。トウヤの身体より剣のほうが大きいもんな。ただ剣を振るのは力任せじゃ駄目なんだ。ちょっと貸してみろ。」
と、父ちゃんと呼ばれた青年タチオはトウヤと呼ばれた少年より剣を受けとる。そして、諭すような口調で、

「いいが、トウヤ。人には体内に流れるオーラつてものがある。それを上手く操ることで力も速さも何倍にもすることができるんだ。」

と、タチオは木剣を受けとると同時に全身にオーラを纏いだした。淡く身体が光りだし、剣先まで光りだした。

「よく見ておけ。これがオーラだ。このように自分の身体から手に

持った武器にまでオークを行き渡らせる」とで破壊力や反応速度が数倍から数十倍に跳ねあがる「

と、おもむろに田の前にある大岩へ剣を振りかぶる。

ド、ゴンー！

そんな音がし田の前の大岩が真つ二つに割れる。

「！」のよつこオーラを纏つた武器で斬ると木剣といえどかなりの破壊力になる」と説明する。

「まあ、こきなりやれといつても無理だらうから徐々に覚えていけばいいわ。まあ今日せひここまでにしておけよ。汗拭いとけよ。」

そうじつてタチオはトウヤの頭を軽く撫でて、家のほうへ踵を返した。

「おーら・・・？」

三歳の少年には言葉のみの説明が難しいと判断したのかは分からないが、実際みてもよく分からぬといった風情の少年がそこに立ち尽くしていた。

第1話～序章～（後書き）

「」意見、「」感想あればよろしくお願い致します。

第2話～旅立ち～（前書き）

大筋みたいなものを書いてないので内容がわかりづらいかもしだせん。
また、文章の拙さはご容赦下さい。

第2話～旅立ち～

暦255年

いざ、出発しようとして家の庭先で佇んでいたら、ふと修行を始めた頃の記憶が頭を掠めた。

「そういや、あの頃はまだ自分の本当の能力も知らなかつたな」
軽く独りごちてみる。

「まあ、右も左もわからんようなガキだったからな。しじつがない
か」

その時後ろのほう、つまり家の玄関から大きな声がした。

「トウヤーー元氣でやれよーー魔物に気をつけなーー！」

親父も心配性だな

「分かつてゐつてー、父さん！それじゃあ、行つてきまーす！」

俺も後ろを向き右手を挙げて大声で返す。

「さてと、行きますか」

こうして俺は生まれ育つた村を出た。この先起じるであろう様々なる出来事に胸を躍らせながら。

「村の外へ

そして今、感覚的に村を出て30分ぐらいもした頃だらうか、俺は何と言つて困惑していた。

とこいつのも、

「聞いてるの?アウヤ?まやはいつちの海沿いよりも山道を通ったほうが隣の村にずっと近いのよ?」

と、話しかける奴が居るからだ。

「いや、だからな、俺が聞きたいのは隣の村への近道じゃなくて、何故お前が村を出て此処に居るかということなんだが……ネク」

するとそいつは何故か微かに目をそらしながら、

「だ、だから私も母様からちゃんと許可を取つて村を出てきたって言つてるじゃない!」

と軽くキレながら言つてきた。

たしかにこいつ（ネク・カナワ）の母ちゃん（アオイ・カナワ）の大らかな性格なら、例え女の独り旅でも、大して気にせずに旅の許可をくれそうだが……ちなみにこのネクは、俺のお隣さん家の一人娘で、俺にとつて所謂幼なじみつてやつだ。しかも誕生日が二月ばかり俺より早い。そのせいいかやたらと年上ぶつてきやがるのがアレだが……はあ……そんなことよりも、

「いや、俺が言いたいのはなんで俺が村を出た後にお前が後ろから追つてくるようなタイミングで現れたってことなんだが。お前はもう少し早く村を出ることができた筈だろ?」

と俺が言つと、こいつは言い訳がましく、

「い、いや私も自分の誕生日に村を出ようとしたのよ?ただ、色々と都合が合わなかつたっていうか、気がのらなかつたっていうか、・

・・独りじや不安だつたつていうか・・・な、なによ！こんな美少女と一緒に旅ができるつていうのに何が不満なわけ！？と逆ギレしてきた。

不満つていうか、まあ確かにこいつの見てくれは身長155？程度で小柄だけど、腰まで伸ばした絹みたいなサラサラの黒髪に異常なぐらい白くて綺麗な肌、2年ぐらい前から急に大きくなりだした胸、にも関わらずやたらと細い腰、猫みたいな大きな黒い瞳と整った形の鼻や口、と傍から見たら間違いなく美少女の部類には入るんだろうが、いや入るのか？

まあ、人口500人程度の村では同年代の子供は居らずいまいち基準がよく分からんが、そこは大して問題じやない。

俺の自由気ままな独り旅計画が・・・

撒くか？いや、それでもしこいつが魔物や山賊とかに襲われたらさすがに寝覚めが悪いな。

はあ・・・

まあ、とりあえず隣の村までは一緒に行つてそれから考えてみるか。規模が俺の村よりも5倍はあるつて話だしな。

「分かつた、分かつた。一緒に行こうぜ。とりあえず隣の村まで。口入屋で仕事も探す必要があるだろうし、宿屋も探す必要」

そこまで言つて、異常な気配と聞いたことがない声が後ろから聞こえた。

振り替えるとそこには、顔が魚っぽく、体つきは人っぽい何かが立っていた。

第2話～旅立ち～（後書き）

「」意見、「」感想、等あればよろしくお願ひ致します。

第3話～遭遇～（前書き）

いまいち行の間隔がつかないので、読みづらいかもしませんが
ご容赦ください。

第3話～遭遇～

そいつは今まで見たこともないような姿をしていた。魚のような顔（（といつても大きさは人の顔ぐらいあるが）、大人と同じぐらいの背丈（165～170？程度）、手足に生えた鱗と青っぽいというか、緑っぽいというか何とも表現し難いぬめっとした皮膚、明らかに人間ではなかつた。

ネクが
「は、半魚人？」
と言つ。

「半魚人？あれって魔物の部類に入るのか？確かに異形じゃあるが・
・」

そもそも、今の世でいうところの魔物の定義とは、

『人語を解さず人間へ害意を持つ異形の生物』とされている。つまり、こちらの言葉が通じずしかもこちらへ攻撃してきたり食料にしてこようとする生物が魔物というわけだ。

だから、ものは試しだと俺はそいつに話しかけてみる

「あー、えつとその奴、俺達に何か用か？」

と、俺が言うとその半魚人？らしき生物は目を大きく見開いた。

「オマエ、俺を見て驚かないのかつ！？」
何か言葉が通じた。

「い、いや、確かに見た目は人間じゃないけど、別に襲いかかって
くるわけでもないしな。それよりも今お前が喋つたことに驚いたが。
・・」

俺がそう言うと、半魚人は

「オレはこう見えてオレの一族では天才と呼ばれている。一族の中
には、人語を喋れない奴も居るぞ？むしろ喋れない奴のほうが多い
な」

流暢に返してきた

「そうか、天才の一言で片付けるのもどうかとおもうが・・・別に
俺達を食おうとしたり襲いかかってくるわけじゃないんだな」
俺がそういう言うとそいつは憤慨して、

「人間が人間以外の生物に対して偏見を持つてはいることは長の話や
人間の書物などで知っているが、勝手に決め付けるな！そもそも俺達魚民は海藻や貝ぐら
いしか食べない大人しい生物だ！」

「魚民っていうのか・・・まあ、お前の言いたいことは分かった。
じゃあ、改めて聞くが俺達に何の用だ。まさか、ただ話しかけたか
つただけか？」

そう言つと魚民は、

「それもある。この道を人間が通ることは珍しいからな。」

と言つた。

するとネクが、

「そうか、ここはもう村の結界外になるのね。だからか・・・漁師の人達は普段は村付近の結界内で働いてるからね。」

ちなみに結界とは、かつて250年以上前に歴が始まった当初、この『火の大陸』を制覇した時の王スサノオが各地域を統治しやすくするために、結界技能を持った者、当時妖術師と呼ばれた者を書き集めて、当時存在していた集落毎に施していくもののことである。その結界の範囲を基準に現在の各村が作られていった。正式な呼び名は人口100人以上の集落を村、人口1000人以上の集落を町、人口10000人以上の集落を街という。街規模になると、俺の村では見たこともないような珍しい物がある。何年か前に来た行商の持つてきた、あの甘い菓子・・・

「それで、本当に何の用なんだ?確かにもの珍しいとは思うが、この道に全然人が通らないというわけでもないだろう。なんでわざわざ俺達に?」

と俺が言うと魚民は、

「確かに、人間自体は何回か見たことはある。ただ俺的好奇心は並外れていてな、珍しい人間の番つがいが見れて思わず興奮して近づいてしまった。俺達魚民は成人して時期がくれば、卵を産み出して子孫を残すが、オマエら人間は雄と雌が交尾して子孫を残すのだろう?だから交尾が見れるとと思つてつい近づいたんだ」

といった。なるほど、つまりこの道は人が通ることもあるが俺達のように男と女が二人揃つて通つたことはないと。それが珍しくてつい近寄つたと。納得だな。

すると横の奴が

「な、な、な、何を言つてんのよあんたつ！？、つがいつ！？、こ、こ、こ、こうびつ！？な、なんであたしとこいつが番つがいでこ、こ、交尾こうびしなくちゃいけないわけつ！？交尾こうびするにしても、こ、こいつちだつて、段階だんかとか準備そなへとかそれなりに雰囲氣ふんいきとか必要なんだからねつ！？」

「うん、落ち着け。微妙まほうに論点ろんてんがずれてるぞ。あー、それと魚民うみん？。俺達は別に番つがいでもなんでもないぞ。ただの知り合いの男と女つてだけで、別にお前が期待することはないぞ。」

そう言いうと魚民は、

「や、そうなのか。珍しいものが見れると思ったのだが・・・まあ、初めて人間と話せただけでもよしとしよう。」

と納得した感じだった。

「まあ、俺も珍しい奴と喋しゃべれてよかつたよ。それと偏見は改めるわ。悪かったな。旅の途中だから、俺達はもう行くぞ。縁があつたらまた会おうぜ。」

俺はそう言いつと手を振つて魚民に別れを告げ、踵を返して歩き始めた。

「・・・ただの知り合い・・・そつよね、そんなものよね・・・

横でネクが小声で何かボソッと言つたよつだが、俺にはよく聞こえなかつた。

第3話～遭遇～（後書き）

大まかな設定は纏まっているのですが、それを文章にするのが難しいです・・・

第4話～魔物～（繪書き）

やたらと説屈くればこ話になつまつた・・・

第4話～魔物～

俺の村は名前をカリュウ村といい、場所はこの火の大陸の最南端に位置する。

その名産品といえば、海に近いという地の利を活かして収穫の多い海産物が真っ先に挙げられる。

他の地域に行商に持つて行く主な商品としては、一番近い村でも、大人の足で歩いて片道に最低3日は掛かるためやはり日持ちのする魚貝類の干物等が多くなるのは、まあしようがない。

隣村は海から遠いためそれらは毎回完売するらしい。

他には、農作物やら織物やらが主力商品とは言わないまでも、安定した供給を行えるので、隣村には固定客がついているらしい。

そんな感じで物についてはそれなりに他の地域と上手く取引をしていると村の行商人達は言っていた。

物以外でカリュウ村の有名なモノと言えば二つありその一つには剣術が挙げられる。

それは、ここ数年でじわじわと有名になってきたという話だがそれには理由がある。

この大陸の首都であるカグツチという街で年一回開催される格闘大会でのここ数年の優勝者が、カリュウ村出身のヒノカ流剣術の使い手だということだ。

まあ、知り合いの姉ちゃんだが。

何でも華奢な見た目とは裏腹に鬼神の如き動きで物凄く強いことから人目を引き出身地や流派が他の大会参加者や観客から注目されたらしい。

優勝後、街にある城への土官の話、旅の用心棒、町や村等の警備、ついでに縁談が相当数本人へ舞い込んだらしいが全て蹴つて今は街

で悠々自適に暮らしているとその人のお母さんは言つていたが。まあ余談だが。

もう一つの有名なことは現在より何百年も前から、
『世界の7大陸にはそれぞれの大陸に一本ずつ、神劍しんけんが刺さつてお
りそれが大地や生物を活性化させ、生活を豊かにしている。それを
引き抜き手にした者は人であれ鳥であれ魚であれ神と等しき力を得
るだろ』

という確信めいた、冗談のような、『7神劍物語』（ななしんけん
ものがたり）、という話が言い回しや言語が違うにしてもどの大陸
にも似たような話が伝えられているらしく、その話を基に、火の大
陸初代霸王であるスサノオが大陸統治後に火の大陸の神劍を追い求
めたという話が残つてている。

結局見つかったという話はなく（どの大陸でも）、近年に、とある
探索方法が見つかるまでは、神劍探索についてはずいぶんと下火に
なつていたが、その新しい探索方法により、神劍らしき場所に大体
の見当がついたということで、現在街では神劍探索隊が編成されて
いるらしい。

その探索方法とは単純な話で、「神劍がある場所に近づくほど魔物
が活性化するのではないか」

という説をとある学者が以前に打ち出したらしく大陸中の測量と魔
物の分布図を作成するため旅を10年程度し、最近漸く完成しそれ
を見当した結果、大陸の南側の方が明らかに魔物の質、量が高いと
いうことが判明したのだった。

だから、大陸の南側に神劍が刺さつてゐる可能性が高いのではないか？との説が広まっていき、最南端にあるカリュウ村に何かしら神
剣と関係があるのでは？という話が広まっていき、カリュウ村が大陸で有名になつたのはまあ、大会優勝者の話と合わせ、偶々そんな

時期が重なった、のだと思うことにしよう。

まあ、何故急にそんな事を思つたかといえば・・・

「トウヤー！なにボーッとしてんのよつ…右に回つこまれてるわよ！」

とネクが叫んでいた。

というのも昨日魚民と別れ海沿いの道を進んだあと、山道に入った俺達は今、魔狼の群れに囮まれていた。魔狼とは、見た目は狼のようだ、だが狼の体長を倍ぐらいにした（ざつと見て3mぐらいか）、全身真っ黒な毛に覆われた、自分達以外の生物は餌ぐらいにしか考えていない魔物の呼び名であり、並の人間が戦えば大人2人でようやく一頭と渡り合えるといった程度の強さの生物である。そんなやつが俺達を取り囮んでいた・・・10頭ぐらい。

いや、待て。数がおかしくないか。聞いた話では確かにこの生物の習性は数頭群れて獲物を襲うということだが、明らかに多いよな。いくらこのへんが大陸の南とはいえ活性化しそぎじゃないか。そう思いつつ俺は右側に近づいてきた魔狼へ対して腰から抜いた剣を横に薙ぎ払い魔狼を胴から真っ二つきした。

「ギャウンッ！？」

そんな鳴き声と共にその魔狼は倒れた。

「グルルルルツ」
「ウーーー」
「ガオン！ガオン！」

その様子を見た他のやつが俺達を遠巻きにしながら吠えてきた。今にも飛びかかってきそうな体勢で。

「さすがにあれだけの数に同時に襲いかかられたら不味いな」

俺がそう言つとネクが、

「あんた何言つてんの！？あんたが有無を言わさず切り捨てるから手持ちの食糧を蒼いてその隙に逃げよつとしたあたしの作戦が台無じじゃない！」

と言つてきた。

「いや、やつは言つけどな？それは一頭一頭ぐらいなら何とか通じる作戦だろ？さすがにあの数には足りないと思つんだが・・・」「

するとネクは

「じゃあ、どうするの！？行商の人気が持つてる魔物避けもないし、逃げ切れそうにもないし、どうしようもないじゃない！？」

と焦つた様子である。

「まあ、落ち着け。俺の強さは知つてゐるだろ？あの程度の数どうしてことないぞ。」

俺が言うとネクは、

「ま、まあトウヤが強いのは知つてゐるけど。あたしが言いたいのは剣でどうにかなる数？つてこと

と言つてくる。

そこで俺は漸く合点した。ここへは同じ剣術道場での剣技ぐらいしか見せたことがなかつたつけ。

「違う。俺の本当の実力を見せてやるよ。・・・下がつてろ

俺はそう言つと愛剣の炎斬えんざんへと意識を集中させ始めた。すると・・・

「えつ？なにこれ、剣が光り始めた？」

ネクが言つ。

「ああ、これが所謂オーラつてやつだ。このオーラを利用することによつて、剣と俺の体は何倍にも強化することができる。ただ昔見たけどニールナ姉もオーラを使ってたぞ？知らなかつたか？」

そう言つと俺はオーラを纏つた炎斬をネクへ見せる。ちなみにニールナとは三歳上のネクの姉貴で、実は大会優勝者その人である。

「ニールが？確かに昔から強かつたけど・・・」

と若干腑に落ちない顔をする。

「まあ、いいや。さて行くぞ、魔狼どもつー。」

そう言いながら俺は魔狼の群れに飛び込み斬りかかった。

ズバツ！ザシユツ！バキッ！

「グオーツ！」

「ギャン！ギャン！」

「クゥーン・・・」

そんな鳴き声とともに魔狼は全頭地面に倒れ伏した。

「まあ、こんなもんだ。強いだろ？俺？」

俺がそう言つとネクは、微妙に納得してなさそうな顔で、

「オーラつて何かズルい・・・」

と結構心外なことを言つていた。

いや、別にズルくはないだろ・・・

俺は軽く嘆息し旅を再開した。

第4話～魔物～（後書き）

不快感がなければそれでいいです。『ご意見』『ご感想』あればお願いします。

第5話～温泉街～（前書き）

イメージ通り、には進まないものです・・・

第5話～温泉街～

魔狼の群れと遭遇後、もう一日ばかりかけて夕刻頃、漸く一番近い隣の町イグナへとたどり着いた。

その町の入口にある門を見上げて、

「大きいな・・・」

俺がそう感嘆の声を洩らすと、

「大きいね・・・」

と、横のネクが似たようなことを言つた。

「いや、カリュウ村にも似たような形の門はあつたけど、大きさが違い過ぎるだろ?」

そう、カリュウ村の入口にも門があるが精々3mぐらいの高さしかなかつたが、この村の門はどう見ても10mはありそうだった。

「いやー、流石に村の規模が違うだけあるね。あそこが守衛所かな?」

そう言ってネクが向かって右にある小さい建物を指す。

「だろうな。えーっと、知らない村に入るには、身分証明書が要るんだよな。どこに仕舞つたっけ。」

俺は手持ちの頭陀袋に手を突っ込み身分証明書を探す

「あつた。よし行くぞ。」と言つて、入町の手続きをするため守衛所らしき建物に向かつた。

（イグナ町）

町へ入る手続きを終えた俺達は、町中に入り目的の場所を探した。
我儘を言つ横のやつのために。

「もーーーっ！宿屋は何処なの？イグナ名物の温泉宿屋はっ！！」

「おい、落ち着けよ。守衛所の人も言つてたろ？温泉街は町の外れにあるつて。そう直ぐには着かねえよ。」
としようがなしに俺は宥める。

ここイグナは源泉が湧き出るとかで温泉が名物の地域である。
湧き出る量も豊富なため、それを利用して何軒も温泉用の宿屋があるらしい。

それ目当てにこの町へやつてくる人も多いらしく、宿屋も必然的に増えていき、それに伴い色々な商売、例えば料理屋、名産品店、飲み屋、賭博場、等々の建物も増えていったという話だ。まあ、町の外から来た人は、温泉に入った後は羽根を伸ばしたい気分になるのだろう。

また、地元の人も家でわざわざ薪や火を使って風呂を沸かすよりは経済的なのか、温泉には常に人が多いとのことだ。

「おっ！それっぽいところに来たんじゃないかな？」

それから一時間弱も歩いたところで、雰囲気の変わった場所に出た。妙に熱氣があるな。

「キタキタキターネック」ネクがアホみたいに騒ぎだし、駆け出そうとした。

「待てっ！止まれっ！さっき聞いたお薦めの温泉宿屋を探すぞ！飯が安くて量が多く美味しい、チヒロ屋つて宿屋を！」

俺は慌てて声をかける。
これだけは外せるか。

「ええー。」飯はどうしてもいいよ。それよりも湯船が広くて、美容に効く温泉がある宿屋を探すほうが・・・・・・うん、チヒロ屋を探そう！

何故か俺のほうを見ながら焦ったネクがそう言い出した。

いや、別に腹が減つて機嫌が悪いとかじゃないだ。

本当は温泉はどうちでもよくて飯のためにここまで付き合ったのに、ふざけたことを言い出したネクを物凄い目付きで睨んだとかそんなことはないぞ。

「ああ、美味そうな匂いからして、多分あの正面にある大きめの建物だと思つ。そつと行くがいいわ」

上機嫌になつた俺はネクを促し、早足で先に行く。

「や、そうね。早く行きましょ。」

(危ない、危ない。そういうえばこいつは「飯の邪魔をすると物凄く機嫌が悪くなるんだつた……それにしても匂いって……)ネクはそう思った。

その時、右の料理屋らしき建物の扉が開き女の子が飛び出してきた。
「助けて!」

そう言いながら私の後ろに隠れた。

年の頃は私と同じか少し下ぐらいで、着物の上に白い前掛けをしていた。

続いてその扉から屈強そうな顔を赤くした男達が出てきた。3人ほど。

「お~お~お~姉ちゃんよ、逃げる」とねえだらうひょっとお酌してくれって言つただけじゃねえか」

真ん中の大柄な男が笑いながらソラヒが言った。左右の二人も何が嬉しいのか笑っている。

「嘘ですー!無理矢理座らせて手とか、お、お尻とか触つてきました
!」

その女の子が涙目になりながら私に訴えてきた。

「あれー？酒代にお姉ちゃんへのお触り代も含まれてるんじゃねえの？」

右側の太った小柄な男が

嬉しそうに言つ。

左側の瘦せてひょろつとした男が、

「まあ、いいじゃねえか姉ちゃん。戻つてこいよ。呑もうぜ？」と笑いながら言つ。

「う、うちはお料理屋でやつたことは一切してません！」

と女の子が必死になつて言つ。

「うるせえっ！ うちは代金払つてんだ…やつたらと戻つて相手しやがれっ！」

と真ん中の男が怒鳴りだした。

私は煩わしいと思いながら「あのー、この子も困つてるみたいなんで、あんまり無茶なことを言わないほうがいいんじゃないでしょうか？」

と遠慮がちに言つてみる。

すると、男達が顔を見合させて笑いながら、「お姉ちゃん別嬪だな。いいぜ、店を出るから俺達に付き合えよ。宿屋で一緒に呑もうぜ。」

と真ん中の男が私に言つてきた。宿屋？

「それは嫌です。あなたたちの相手をしている暇はありません。大人しく中で呑めないなら勝手に宿屋でもどこへでも行つて下さい」

とこうと、何が嬉しいのか、

「おー、気の強い姉ちゃんだこと。まあ、いいから、いいから。」

と言つて、酒臭い息を撒き散らしながら私の腕を掴んできた。その時、

「おい、ネク！何やつてんだ！早く行くぞ？」

結構先まで歩いていたトウヤがこちらへ走つて戻ってきて怪訝そうにした。

「誰だ？」

トウヤが言つので、私は

「酔っぱらい」

簡潔に答えた。

「ふーん。おっさん、こいつは俺の連れなんでその手を離してもらえるか？」

と言つと、

「あーん？なんだてめえは？」この姉ちゃんは俺達と一緒に呑むんだよ。すつこんでろ！」

と凄んでいた。だがトウヤは、

「いや、おっさん、聞こえなかつたか？俺は手を離せつて言つたんだが。それにそいつは今から俺と飯を食うんだよ。邪魔すんな！」
キレ氣味に言つた。

「い、このガキイーおこつーこのガキやつちまえ！」と後ろの一人

に言ひ。

「おじおい兄ちゃんよお。お前」那人の楽しみを邪魔するとはどういつつもりだ？あん？」

「そうだぞ。そんな野暮なやつはこうだつ！」

とひょろつとした男がトウヤに殴りかかつたが、トウヤはその腕をかわし、右拳を男の顔面に叩き込むと、もう一人の小柄な太つたほうのお腹を右足で蹴りとばした。

二人の男は悶絶した。一人は口から何か吐いていた。「ぐうう」「ぼえええつ！」

一連の動作はほぼ一瞬である。

そこに居る女子と大柄な男はポカーンと呆けていた。

「て、てめえクソガキ！なにしやがる！」

と私の腕を離すと、大柄な男はトウヤへ向きあつた。

「いや、なにつて？殴りかかつてきたんで、殴つて蹴つただけだが？」

トウヤがキレ氣味に言うと男は青ざめた顔で、

「て、てめえツラ覚えたからな！覚えてろよ！」

と言ひながら後ずさり、二人の男を引き摺るように逃げて行つた。

するとトウヤが呆れたように、

「なんだ、あれ・・・まあいいや。ネク！早く行くぞー。もう腹が減つて腹が減つて・・・」
と、踵を返して歩きだす。

「わかったわよ。さあ行きましょ。」

と私が言つと、

「待つて下さい！」

そんな声がかかつた。

女の子は、

「あ、あの、ありがとうございました！おかけでたすかりました」と律儀に礼を言つてきた。

「いいの、いいの。偶々通りかかっただけだから、気にしないで？」と私が言つと、女の子は

「いいえ！そういう訳にはいきません！お礼をさせて下さい！あのー、もし良かつたら」飯を食べて行かれませんか？もちろん代金は結構です」

女の子が私にそう言つと、それが聞こえたのかトウヤが振り返った。目を輝かせながら。

これは絶対食いついてるわよね・・・温泉でお肌ツルツル計画が・・

まあ色々な話が聞けるか、と思い直し
「わかった、有り難くご馳走になるわ」と、女の子へ笑いかけながら言つた。

第5話～温泉街～（後書き）

「」意見」「感想などあれば、お願ひします。

第6話～仕事～（前書き）

内容をぶつりやけないと説明の回です。

第6話～仕事～

田の前にどんどんお皿が積まれていく。
確かにうちの店の料理は地元の人にも観光客にも評判が良く、イグナ温泉街一の料理屋と言われることもある。でも、いくらなんでもこの量は・・・

そんなことを思いながら、給仕の女の子はボーッと田の前の状況を見ていた。

田の前には、

「うん！これは美味しいな イグナ地鶏だつけ？肉の歯応えも最高だし、甘辛い味付けも肉に合つてやたらと箸がすすむな！」

と、箸を休めることなく料理を片付けていく少年が居た。

「あ、あんた！少しほは遠慮つてものをしなさいよ！もう何皿目なの、イグナ地鶏の丸焼き？ひー、ふー、みー、・・・もう一〇皿いつてるじゃない！」

と連れの少女が叫んでいた。

「えー？もうそんなに食つたか？美味すぎてついついおかわりしちまつたよ。まあ、腹八分が健康にいいって話だし、このくんにしどくか！」」ちやうさん！ありがとう、マー！」

と、給仕の女の子」とマー」・ナカヤに少年がお礼を言つてきた。

「い、いえ喜んでもらえて私も嬉しいです。それにしてもトウヤさ

ん、よく食べられるのですね？」

ちなみに私はイグナ地鶏の丸焼きは、一皿の三分の一ぐらいでお腹がはち切れそうになるのだが……

「やうか？ 何ならちょっと食い足りないぐらいだぞ？ まあ、それだけ料理が美味かつたってことだろ」

と、恐ろしいことを言った

「ま、まあこいつの食べ物にの量に関してはいつものことだから気にしないで？」

と、連れの少女ネクさんが言った。

さらに、

「何か」「めんなさいね。大したこともしてないのにこんなに駆走になつて……」

と謝られた。

私は焦つて、

「いえいえ、とんでもない！ 本当に助かりました。お礼ができる嬉しさです！ あと、色々お話ができて楽しかったです！」

そう、お一人の出身地のカリュウ村の話や、女の子同士の話ができる、私はとても楽しかったのだ。年も私より一つだけ上なため、話も合つたし。

すると、厨房のほうから、「そつだぞ、姉ちゃん！

あいつらは、イグナでも有名な質の悪い「ロロツキ」もだ。丁度俺が出かけてた隙に店に来て、マーミにちょっかい出してやがったんだ！ 俺が居る時は全然そんなことしねえのによ……」

と、この店の店主兼料理人兼私の父親、ガシュウ・ナカヤは言った。

(店主は見た目がいかついから、それを怖がつていつもマーマーライ

悪戯ができないんじゃないかな)

俺は密かにそう思った。

(まあ、俺達も飯をぐる駆走になつたから、結果的には良かつた、と思つことにしよう)

俺達は食事のお礼をいって料理屋を後にした。

翌日、俺達は町の中心地である場所を探していた。

(昨日は結局、温泉宿屋には行かなかつた。だつて飯をぐる駆走になつたしなあ。俺の目的の九割は飯、残り一割が温泉だ。そのことについて連れは何か言いたそuddtたが、めんどくさいので無視した。)

)

それで、今探している場所といつのは口入屋だ。くちいれや

口入屋といつのは、平たく言えば職業斡旋所あっせんで、日雇いの仕事から短期、中長期の仕事を紹介してもらう場所だ。

また、自分で仕事の依頼、人足の紹介を頼むこともできる。まあ、依頼料に加えて、口入屋への口利き料も必要なので、とりあえず今は関係ないが。えーと、今の手持ちはと・・・795丸か。がん

もう、何日かは宿屋に泊まるが、あんまり余裕はないな。

ちなみに、丸はこの大陸唯一の共通貨幣で、大陸の初代霸王スサノオが、大陸を探索中に見つけた、数百年程度経つた朽ちかけた遺跡から、恐らく貨幣ではないかという数種類の丸い貨幣らしき物を基に作成されたとされている。

作成場所は、これもまた铸造所らしき遺跡を手本として建てた首都の貨幣铸造所しかなく、一目見て分かる見た目の緻密さと材質の稀少さからそこ以外では作るのは可能とされているため偽物は作れないはずだ。

材質は一番小さい物から、1丸、5丸、10丸、（銅製）

50丸、100丸、500丸（鉄製）1000丸、5000丸、（

銀製）

10000丸（金製）

そして形は呼んで字の如く丸く、大きさは数値が大きくなるたびに一回りずつ大きくなつていく。

1丸は親指の先程度の直径だが、10000丸は手のひらぐらいの直径であり、しかも金製なので重い。

物価は、この町で料理屋での定食が一食50～60丸、宿屋に一泊すれば200～300丸といったところだ。

旅立つときに親父から1000丸ほど餞別にもらつたが、このままでは宿屋に泊まなくなつてしまふので、こうして豊かな生活のために口入屋を探しているわけだが。

「ああ、あつた。あれでしょ、この町の口入屋。やっぱりカリュウのよう大きいね。」

とネクが左前方の建物を指していたので見ると

「ああ、あれだな。よし、入ってみよう」

俺は言いその建物に入った。

「いらっしゃいませっ！」

口入屋に入ると、正面の受付らしき木の机に座つた二十代ぐらいの男もとのパツチリした髪の短い綺麗なお姉さんが笑顔で元気よく言った。

俺は、愛想よく笑いながら

「元気いいね、お姉さん？ あんまりきつくなくて稼げる割りのいい仕事を探してるんだけど、何かいいのある？」

と常連っぽく言つてみた。するとお姉さんは怪訝そうに、

「えつと…お密さまは以前こちらをご利用されたことがありますか？」

と言ひのいで、

「ないですっ！」

ところからも元気よく言つてみた。するとお姉さんは若干顔を曇らせながら、

「あ、あのー。それなら初期登録を先にお願いします。

それと大変申し訳ないのですが、初期登録の方の場合は丙の下から^{へい}^げの仕事しか受注ができないのですが…」

と本当に申し訳なさそうに言つてきた。するとネクが

「『めんなさいお姉さん！』このバカの言い方が悪くて。確かにこち
らにお世話になつたことはないんですが、別の村の口入屋で登録し
て何回か仕事をしてきてますんで初期登録は必要ないです。」

と横から言つてきた。

バカつてお前・・・

「あ、あー そうなんですか。妙に慣れた感じがしたのはそのせいなんですね。では、登録証を見せて頂いてよろしいでしょうか。」

お姉さんが言うの俺とネクは其々の登録証をお姉さんに見せせる。

「ほうほう、お一人はカリュウ村の『出身なのですね。お名前はトウヤ・ヒノカ様とネク・カナワ様。

えつ！トウヤ様は等級が乙の中なんですか！？ネク様も乙の下！。ほうほう、登録証を見る限りお一人は今までにかなりの仕事をこなされてますね？」

何か軽く驚かれていた。

まあ、三年ぐらい前に登録して、色々な仕事をこなして来たからな、それなりの等級にもなるつてもんだ。

ちなみに等級とは、下から丙へいの下、丙へいの中、丙へいの上じょうの下、乙とうの中、乙とうの上じょう、甲こうの下、甲こうの中、甲こうの上じょう、甲こうの特上とくじょう

と、十段階に区分されており当然上の等級になるほど難易度が上がっていく。等級を一つ上げるにはその等級の依頼を最低3つは成功させ、なおかつ口入屋の責任者の許可が要る。まあ、魔物退治とか最低限の強さは必要なので、そのへんを見極めるために不可欠な仕組みだとは思う。ネクが俺より等級が一段階低いのは倒せる実力があるのに見た目が可愛らしいという理由で兔（毛皮を採るために）を仕留めそこなつたり、変な失敗を何回かしたせいだ。

大まかな仕事の内容といえば、丙の下などは草むしりとか家の掃除

とかで、大したことはないが、この下とかになつてみると、魔物退治や獣を何頭か狩る、などと難易度がはね上がつてくる。

俺は手つ取り早く稼ぎたいので

「ええ、まあ。数は多くこなしてきたんで、少々きついのでも期間が長いのでも大丈夫ですよ?」

と丁寧に言つてみる。

ちまちまやつて報酬が安いのは嫌だしな。

横を見ると俺の言葉に賛同したのかネクもうんうんと頷いている。

お姉さんは少し思案して、

「うーん。そうですね。仕事に慣れてらつしやるようですが、こちらなんかは如何でしょうか? お一人の希望に沿つことができると思われますが。」

と、受付机から一枚の紙を取り出した。

その紙には、

『鬼族きぞくの村、探索隊募集!
集え強者つわもの!』

未知の種族を調べてみよう!

参加資格: 乙の下以上の等級者十名程度

参加期間: 最短1ヶ月

報酬: お一人最低3000丸、但し成功報酬等は別途ご相談。

依頼人: アズト・ミタワ『
と書かれていた。

第7話～異変～（前書き）

別の人物視点にしてみました。

第7話～異変～

（首都カグツチ）

当代の第16代スサノオ王の居城の一角のとある部屋では一人の男が手元の書類を見ながら馬鹿でかい声で怒鳴っていた。

「これはどうこういことだ！ 何故警備兵の被害報告がこんなに多いのだつ！」

警備の者は何をやつておる！ 他に被害は…」

この方はシバ・ウチカネと言い、『宰相』（さいしょう）という王を武力・経済共に補佐する立場にある、王に次いで地位の高い者である。

年の頃は65ぐらいで、白髪で細く小柄な体格ながらも昔取った杵柄というか、武力官僚出身といつ經驗に由来するのか、よく日に焼けたその皺の多い顔は険しくその怒鳴り声は時に王ですら怯ませることがあるというほどの厳しい御仁だ。

私も今より小さい頃はよく叱られたものだ。主に悪戯で…。

その凄まじいまでの大声で怒鳴られながら、

「はつ！ 事に当たつた警備部隊長からの報告によりますと1隊と2隊の警備部隊を総動員して、魔狼の群れを何とか倒し、街の結界内への侵入は防いだとのことですっ！」

と顔以外を全て保護できる鎧を身に付けた男が答えていた。

こちらの男は名をガロウ・サイハと言い、年は23、高い背丈に引き締まつた体格、黒い長髪を真ん中から無造作に分けた髪型、その下にある整つた凜々しい顔立ちから、城内の給仕の女の子、首都内の女の子から大変な人気がある。

また、この若さで首都の警備部総隊長を務めるほどの武力の腕を持つていることもその人気に拍車をかけているのだろう。私はあんまり好きじゃないが。

その人気者がそう答えるとシバが、

「戯けつ！ 街中への被害が出ないようにするのは警備隊として当然じやつ！」

儂が言いたいのは、何故たかだか魔狼の群れ15頭程度に2部隊48人のうち怪我人が10人も出たかと言つことじやつ！ ましてやその内の重傷者が2名じやとつ！

最近の警備兵は鳥合の衆かつ！――」

と、さらに怒鳴りつけていた。

すると、ガロウが若干氣まずそつに、

「それに関しては面白次第もございません。

今後は今まで以上に訓練に励むように全部隊へ通達致します！」

と答えた。

すると、シバは

「ふんつーまつたくつ！ 儂の若い頃の警備部は・・・・・・」

と長々と説教し始めた。ガロウも可哀想に。

だが、と私は考える。

確かに魔狼はそれなりに手強い。手強いが警備部とは口頃から対魔物用の鍛練をしており、魔狼程度なら並みの警備兵1人でも2～3頭程度なら倒せる実力があるはずだ。それこそ1部隊24人なら魔狼15頭に対して余るぐらいの戦力だ。にも関わらず第1部隊のみならず第2部隊まで投入して、さらに怪我人まで出るとはどうも納得がいかない。

シバとて、そのへんの警備兵の実力などは把握しているはずなのに、頭に血が昇っているのか、その事には触れずに結果だけを見て説教している。どうもおかしい。そう思つた私は説教がうざいといつこともあり、声をかけてみる。

「シバッ！説教はもうそのへんでいいんじゃない？」

そんな昔話よりも今の問題は魔物が街近くまで侵入してくる現状をどうにかすることだと思うんだけど。警備兵の訓練にしたつていきなり強くなるものもないしね。」

するとシバは

「確かにそうかもしけんがのう、姫。じゃが最近魔物に襲われることなく、弛んどつた警備兵にも責任はあるじやない。なにより今の若いモンは実践経験が少なすぎる。

儂らの若い頃は今よりも危険な任務ばっかりじやつたぞ。」

姫と呼ばれた私は、

「でもねえ。私もお父様と何回か警備兵の訓練見たことがあるけど、お父様も別に訓練内容に文句なさそうだったわよ。ねえ、ガロウ？」

と横のガロウに話を振つてみる。

ちなみに私の名前はシエル・スサノオ、年は15のつら若き乙女だ。父は現国王の第16代スサノオで、一人っ子の私は第一王位継承者となる。

（まあ、婿を迎えるのが王になるのだが、私より弱いやつと結婚する気はさらさらない。

自分で言つのもなんだが私の容姿はそれほど悪くはない・・・と思ふ。

今は亡きお母様譲りの栗色の髪を短くまとめた髪型にそれなりに整つていて、と思つ顔、贅肉のない引き締まつた体、あまり大きくなない胸・・・

だから高官の息子とか親族が私を見て怯えるのは見た目の問題じゃなく小さい時から剣術の実験台でボコボコにしてきた結果だ・・・と思つ・・・）

なので、今年元服を迎えた私は政務を覚えるために、宰相であるシバに付き合つて、ここ執務室でガロウの報告を聞いていた。

「はっ！ありがとうございます姫！しかしシバ殿の言われる通り警備兵達にも弛んだ部分もあるかと思いますので、訓練は増やそうと思ひますっ！」

と言つないので私は、

「うん、それはそれでいいんじゃない？」

それよりも私が言ひたいのは何故精銳の警備隊が魔狼相手にそこまで傷を負つたつてことなんだけど。

シバ？報告書にそのへんの所見はある？

するとシバは、

「まあ、実は僕も最初そう思つた。いくらなんでもそこまで苦戦するとはのう。だが報告書には魔狼の数、出撃人数、襲撃してきた日ぐらいしか書いてないのう。何か追記はあるか、ガロウ？」

と言い、ガロウは

「はっ！自分は事後報告しか受けていないので実際にその魔狼を見てなく、各部隊長の言い訳かとも思うのですが・・・」

と歯切れ悪くなつたので、私は

「いいから、どういう風に言われたの？」

と促すと、

「はい、報告の際に、第1第2部隊長が口を揃えて、「今まで戦つてきた魔狼よりも数倍強かつたです！」と言つておりました。

田付は報告書に書いてある通り4日前です。まあ、今まで魔物の襲撃を経験したことなく不意をうけたところもあるでしょうが・・・」

と言つた。私は、

「ふーん。数倍強いねえ。言い訳にしてもおかしいわね。でも、あの真面目な2人がそう言つなら、冗談とか言い訳でもなさそうだから、それこそ実際に強かつたんでしょう？」

と言つた。するとシバは別の報告書を見ながら、

「ふむ、偶々魔物が襲撃したのも4日前か……直接は関係ないと
は思うが、4日前に大陸の南のほうで何か大きく光ったという報告
も入つておるな……こちらは何が起こったか見当もつかんのう。」

と何かブツブツ言つていた

「シバ？ 光つたって何が？ どこが光つたの？」

気になつたので聞いてみると、シバは

「まあ、魔物の襲撃云々とは別の報告なんじゃが、大陸の南、イグナ町に治安の管理者として置いておる者からの報告でな、4日前の夜にある場所……これは島じゃな、島から大きな光が見られたといつ報告じや。ふーむ。」

と言つので、その話が気になつた私は、

「とある島？ どこの、その場所は？」

と聞いてみるとシバは、

「ああ、結界外の場所じやな。イグナの町から数10？ 離れた場所にあつて直接近くで見たわけではないらしいが、その方角にはその島ぐらいしかないのでそらくその島に間違いないじゃね？ といふ報告じや」

と言つが私は場所にいまいち見当がつかないので、

「ふーん？ 結界外なら人は住んでないんでしょう？ 何なのかしら、そ

の光？」

と疑問に思つて言つと

「ああ、人は住んでおらんじゃろつ。ただ大陸平定当初にスサノオ王が結界を張れなかつたというその場所には、ある者達が住んでおるという話じやよ。

儂も見たわけではないから詳しいことは言えんがのう。」

と言つので、私は

「結界が張れなかつた？

ある者たち？どういうこと？」

と言つとシバは、

「ああ、結界はある強大な力を持つた者たちに阻まれて張れなかつたと、文献で見ただけじや。

255年前、当時大きな力をもつた妖術師と呼ばれた者たちの力を

持つてしても、それは叶わなかつたらしい。

その時島に居たのが人語を解し、人の形に近い人在らざる異形の者、
亜人あじんだつたという話じや」

と言つので私は、

「えつ！？それってもしかしてお伽噺とかに出でくる鬼とか、妖精とか、あの？」

と言つとシバは、

「そうじや。まあ、若干種別が違う氣もするが・・・ともあれ、魔

物と違ひそれら亞人あじんなどは滅多にお田にかかるんが当時の書かれた文献には絵入りで書かれておつたよ

とシバが言つので、私は興奮し、目を輝かせながら

「へえーっ！－！亞人つて実在したんだつ－－！
すごいね－－！」

そこにはどんな亞人が住んでるの－－？」

と言つと、シバはこう言つた。

「その島のことは、いつ書かれておつたよ

『鬼族きぞくの住まつ島鬼ヶ島おにがしま』

と。

第8話～島～（前書き）

話があんまり進まないですが・・・

第8話／島／

「いやー、予定人数には少し足りませんでしたが、それでもこれだけの方々に参加いただけるとは思いませんでしたよ！」

ワハハハ！つと走行中の蒸氣と帆を動力にした船の先頭に座つている男が上機嫌にそう言つた。

名前をアズト・ミタラと言い、一昨日口入屋に言つたときに面白そな仕事の依頼をしていた男だ。20代後半ぐらいで意外と若い。聞いた所によると商人兼探索屋で様々な場所で取引しつつ、未知の場所や財宝などを探しているらしい。

あのあと口入屋で受付のお姉さんに他の依頼書をいくつか見せてもらつた俺たちは軽く相談し、最初に見せてもらつたアズトの依頼を受けることにして（一つ依頼を受けると依頼を完遂するまで重複は不可なため相談した。）

資格も依頼条件に合つてたし、中々稼げそうだし、なにより鬼族きしゃくつていう言葉にとても興味が沸いたからだ。

どんな姿をしてるか、とかどれだけ強いのか、とか。まあ、そもそも旅の目的が色んなものをみたり、強くなつたりすることなんでそこは仕方がないと思う。

それにしても当初の予定より数が少ないらしいが、これで大丈夫か？とも思う。募集は10人程度とは書いていたのに俺とネクとアズトを入れても9人しか居ないぞ？予定人数に足りなくていいのか？まあ、依頼内容は調査ということらしいが。それとも、人数が揃うまで待つてられない何らかの事情があるのか？

と、アズトの言葉を聞いて参加者の中で一番年嵩の男が口を開いた。

「ふん、お主のその口ぶりだとよほど参加者の応募が少なかつたと
みえる。

報酬の嘉多は兎も角、内容はそれほど厭込みするほどのものではな
いと思つたがなあ？」

と他の参加者を見回しながら云つ。

最初の自己紹介のときもこのおっさんは文句を言つてたな。この程
度の依頼内容で人が集まるのが遅いだのなんだ。

たしかこのおっさんの名前は、レンジ・ミタノ、等級は甲の下だつ
たか、見た目は色んな戦いを経験してきたみたいな傷がいくつかあ
る顔に髪を無造作に伸ばした坊主頭、うちの親父ぐらい大柄な筋肉
質の身体を鋼の大鎧に包んだ大体40歳前後ぐらいか。

得物はそばに置いてある槍だろう。

と、おっさんの連れらしき男が慌てたように言つた。

「い、いや、それは言ひますけどねレンジさん。僕たちみたいに依
頼が始まつてすぐに偶々口入屋さんに言つた方は少ないんじゃない
でしょうか。

それにレンジさんだつて一度運よく中期の仕事が見つかつたつて喜
んでたじゃないですか？」

この男はおそらくレンジという男と今までに何回か一緒に仕事をし
たことがあるのだろう。気安い感じで喋りかけている。

こちらの男は名前をリクオ・シクラと言い、レンジよりも5~6歳
は年下に見える。見た目は短めの黒髪に浅黒い顔、多少小柄で引き
締まつた俊敏そうな身体に動きやすそうな革の鎧を見につけている。
確か俺と同じこの中の等級でこちらは得物が左右の腰に差した二刀
か。

アズトが、

「いや、私も募集期間は長いかとは思つたんですよ。ただ、以前別口で似たような依頼をした時に募集期間を短くしすぎて人が集まらなかつたので。

まあ、今回は募集期間をあまり長くしそぎても機を失なつたら元も子もないのに、早めに募集を打ち切りましたが・・・」
と尻すぼみに答える。

すると

「まあ、良かつたんじやないの？予定人数はほぼ集まつたんでしょう？この子達は見た目以上に役にたちますよ？」

それにこれだけ屈強そうな殿方たちが居るんだから充分だと思いま
すよ」

と同じ顔をした2人の少女に挟まれた妙に色っぽいお姉さんが言つ
た。

このお姉さん名前はリシナ・ト「コウ」と言い、年は20代半ばぐらい
で、見た目は肌の白いやたらと整つた小さな顔に、色素が薄いのか
茶色いさらさらの髪を肩まで伸ばしすらりと高く細い身体にでかい
胸と尻を包む上が白く下が黒い羽織袴のような服で雰囲気がとにかく
色っぽい。

等級は乙の上で得物はまあ見たまんま』だらつな、あと手元の分厚
い本も何なんか気になるが・・・

お姉さんの言葉を聞いた、傍らの右側の負けん気の強そうなほつ
少女が

「そつよー。私たちが居るんだから何も心配しなくていいよ、ね！師匠！」

おじさんもそんなにくよくよしないで大丈夫だよ！私たちが居るんだから！」

と、朗らかに答える。

一回言わなくとも・・・

ちなみにこの少女は名前をアリナ・クロカゲと言う。ネクと妙に気が合って話してたみたいなんで年を聞いたら俺達の一つ下らしい。見た目は黒髪をおかっぱにし程よく日に焼けた目元のパツチリした美少女と呼べる顔、ネクより僅かに低い背丈に細い身体にリシナさんと同じような羽織袴を着ている。身体の凹凸はリシナさんに比べると少ないもののそれなりに出るところが出でている。等級はネクと同じ乙の下で得物はリシナさんと同じ『』か。

「わたしはまだギリギリ20代なのですが・・・おじさん・・・はあ、頼りにさせていただきますよ、クロカゲさま。」

アズトが軽く落ち込んだように言ひ。

すると、リシナさんの傍らのもう一人の少女が

「・・・うん・・・がんばる・・・」

とボソっと言った。

こちらはアリナの双子の妹でユリナ・クロカゲという。見た目はアリナとほぼ一緒で等級も一緒だが見た感じ性格はアリナと比べて大人しそうだ。得物は・・・ないな。いや、腰に差した短刀か？それとリシナさんが持つてるような本と似たような本が手元にあるが？あの本は・・・？

「まあ、まあとにかくみなさんようじくお願ひしますよーもつやうやう島が見えてくると思いますのでー！」

と、アズトが大きな声で言つた。

そのとせ一番後ろに離れて座つた男が口を開いた

「・・・漸く島か。漸く鬼と戦うことができるのか・・・」

その男は低い声でそう言つた。

見た目は、頭から顔まで覆う兜を被つており、身体もすべて覆いかくすようなこの大陸に伝わる鎧とは意匠の異なる銀色に輝く鎧を身に付けていた。

名前はミシル・タイナつて言つたか。背丈は大柄でおそらくレンジより少し高いぐらいではないかと思つ。兜を取つてないので顔と年はいまいちよくわからんが、声の感じからおそらくそんなに年はいってないと思う。20代半ばから後半つてところか。
等級は乙の上で得物は背中に背負つた大剣だらう。

それはともかくこいつは今鬼と戦つて言つたか？

確かに全員武装してるがそれはあくまで島に生息する獣とか魔物とかへの備えだろ？仮に鬼が居ても調査が前提の依頼でこいつは何故戦うことが前提なんだろう？

そんなことを考へてゐるとネクが

「ねえ、ホントに鬼族つて居るのかな？」

と言つてきた。依頼を受けてからずっとこの調子である。楽しみにしそぎだら、こいつ。

「多分な。会えるかどうかが分からんが。

古い本で読んだことがあるが、かつて、それこそ250年前か？には実際に鬼を見たこともある人が居るらしい。その当時の記録はあるからな。

ただ気になるのは、その当時からかなり文明が発達して今みたいに大して時間もかからずに行ける距離なのに何故今まで誰も行ってないのか。行く価値すら無いと判断したのか？

いや、もしかしたら行つた人も居るかもしれないが鬼族に会つたといつ記録もない。何故その記録がないのか？それが分からん」

と俺の話しを聞いていたのかアズトが、

「ええ、もちろんヒノカさまの言つ通り過去にも何回か行つたという記録はありますよ。

ただ、それは海の途中で断念して引き返したりだとか、予算の都合上だとか、島内の地理が険しいとか、様々な理由があるらしいです。それで結果としては悉く鬼族に会えなかつたということです。かつて鬼族に会えたのはスサノオ王率いる妖術師を含む優秀な調査団だけでスサノオ王や妖術師が居たから何らかの特殊な力を使って鬼族に会えたのでは、というのが今現在の最も有力な説です」

俺は、

「じゃあ、アズトさんは何故今回はこの計画を実行しようと思った？過去に何度も失敗してるなら今回も失敗の可能性が高いと思うが？スサノオ王も居ないし、妖術師も居ないのに」

疑問に思つて聞いてみる。リシナさんが何か言いたそうにしたがアズトが、暫く何かを考えるようにして、

「そう思われるのはごもっともだと思います・・・・・・ここまできたら正直に白状します。実は今回の依頼に関しては政府が大元

の依頼者なのです。

そして依頼書には便宜上、鬼族の調査依頼と書きましたが、実際の目的は違うのです。」

と言つので俺は

「目的が違う?

じゃあ何のためにアズトさん、いや政府は結構な予算まで使ってこの依頼を行つたんだ?」

微妙に納得できないので聞いてみた。するとアズトは
「それは島に到着してから話そつと思つていましたが・・・いいで
しょう。今からお話しします。隠すことでもないですしね。

実は今から約1週間前の夜に、これから行く鬼ヶ島で大きな光が観
測されたそうなのです。一番近い町であるイグナの観測所から見ら
れたので光った場所は鬼ヶ島に間違いないです。それに何か不吉な
ものを感じた政府つまり王ができる限りその光が何かを早く迅速に
調査すべきだと判断し、イグナに拠点のある商人の私にイグナで人
を募つて調べろと私に命じたのです。

首都から調査隊が来るまでは時間がかかりますしね。何があるか居
るのか分からないので本当はまだ人数が欲しかったのですが、そう
いった事情により募集の延期が不可能だったので、募集を希望人数
以下で打ちきつたのです。」

と教えてくれた。するとネクが、

「えつと、じゃあ鬼族に関しては何もしなくていいことつことです
か?」

と尋ねた。するとアズトは

「いえいえ、そもそも島のどこが光ったか分からぬため結局は島全体を調べてもむづつことになります。その過程であわよくば鬼族に遭遇できたら何かしら結果を残したい交流をしてみたい、とは当初から考えています。最低期間の1ヶ月とは島を調べながら回るのにそんぐらいはかかるだらうとのことで設定しました。」

ネクが、

「わかりました。教えていただきありがとうございます。別にやることは変わらないようだし、何故急に鬼ヶ島へ行くのか理由がわかつたのですつきりしました。」

と言ひ。アズトが、

「みなさま、そういう事情ですので、よろしくお願ひ致します。つと、見えてきました。あのうすら見えるのが鬼ヶ島です！」

と進行方向を見ながら行つた。感覚的にはあと20～25分ぐらいで着くだろうと俺は見当をつけた。

それから適当に雑談しながら15分少しつた頃、俺達が乗つてゐる舟は鬼ヶ島まで数百mの距離まで近づいた。

アズトが、

「あと5分ぐらいで島に着きます！みなさん一準備はよろしいでしょうか！」

といつので、参加者が各自返事をしたり身支度をし始めた。

「では、みなさま。島に着きましたらくれぐれもほぐれないようこ

・

と、アズトが注意事項を言おうとしたとき、

ド――――ンツ――!

という大きな音がし、それとほぼ同時に、舟のすぐ傍の海が大きな衝撃に襲われた。

第9話～大砲～（前書き）

少し間が空きました

第9話／大砲

それは唐突に起こった。

転覆こそしなかつたものの乗っている舟は大きく傾き水飛沫が波となり舟を覆つたため、最初は何が起こったのかは一瞬分からなかつた。

ただ、先程聞いた音と現在の状況を鑑みるに、乗っている舟そのものではなく、すぐ傍の海に何らかの攻撃を受けたのだということは分かつた。

俺は舟の周りを見渡して、凡そ数百m後ろのほうに僅かに白煙を上げている舟が一隻見えた。

火の大陸では火の神剣の恩恵によるものか硝石がどの大陸よりも多く採掘される。

硝石はそのまま使わずに加工をすることによつて火薬となり使うことができる。暦が始まる前ですらもほぼ全ての集落で加工方法は確立されていたのはこの大陸ならではの特性だとも言える。加工された火薬は様々な面で人々の生活に活用されている。

それは、日常生活において調理や風呂焚き、鍛冶などの火を使う作業の際に燃焼を促進するためというのが最も普遍的な活用方法であるが、一部の者にとつては別の利用方法がある。

例えば首都や街、大きな町などにある技術研究所では、過去の文献資料や遺物を基にした様々な研究、開発を行つてゐるが（場所によつて規模や求める内容の違いは勿論あるが）、その研究の中でも最

も急務とされるのが燃料、武器、この二つの確保、開発である。

まず燃料の研究の必要性とは何か？

それは移動の効率化、新たな移動手段の開発にある。

現在でも馬車などの移動手段はあるが、舗装がされていない山道等が各集落を繋いでいるため移動速度は決して早くない。辺鄙な場所にある村へ行く際にはその手前の村に馬車を預けることもあるぐらいだ。

それゆえ一部の富裕層を除いて馬車の使用方法はあまり好まれていない。

そういうつた現在の状況により燃料を優先的に研究するのは必然とも言える。

そして、かつて数千年前にあつたとされる文明においては移動について驚くべき記録が遺されていた。

それはこの広大な大陸を僅か2日程度で縦断していたというものだ。現在でこそ約二十年前に確立された蒸気船の移動速度により海上の移動においてのみ、大陸の端から端まで約10日程度でたどり着くことができるが（海上で運よく魔物に遭遇しないことを前提として）かつては陸路を通つて大陸を縦断するには最低でも半年はかかるとされていた。

なので、各村や町の交流、非常時への迅速な対処などの理由から陸路においての新たな移動手段の確保、移動手段への燃料の開発は最も急いで確立すべき分野だとされている。

（ちなみに実物や絵こそ遺つてないものの文献から推測された移動手段の形は、車輪が2つないし4つある本体に動物を利用せず燃料を利用した数人ていど運べる無機物、車輪を利用せず移動手段用の専用通路が確保された数百人が一気に移動できる燃料を利用した大きな無機物が検討されている。

前者は普遍性はあるものの移動手段である本体の開発における途中過程が行き詰まりまた燃料の確保開発方法に検討もつかない状態で

あり、後者は蒸気船の応用により移動の原理や燃料は解析可能なもののようにも思えるが実は、現在ある道の整備且つ移動用の専用道の確保が先ずは先だといつ、大きな問題点を抱えている。

武器の開発については、新たな移動手段の発展と同じく大きな規模で研究が進められている。
基本的にこの大陸で武器というのは、魔物との戦闘用のもののこと

を指す。

倒しても倒しても絶滅することのない魔物、その発生源や発生要因は魔物の分布図を作成する際にも不明だつたという話だが、人を襲つてくる以上はそれに対抗する手段を得なければならぬ上に素手の格闘のみでは限界があるので、より効率の良い武器の開発というものは必須となる。

対抗手段の主流としては剣術だが、遠距離からの攻撃ができる弓、石や刃物の投擲とうりきも戦法としてよく使われる。（鉄鉱石の採掘、鍛冶屋、警備兵、等は安定して職が得られるためなりうとする者は少なくない）

なので、剣や弓等の武器屋は大抵どこの村にある。だが、戦いの手段を持つものの自体は、人口の多い街ならばともかく人数が少ない村などは少ない、もしくは1人も居ないというところがあるため、例えば大量の魔物に襲われたり不意に襲撃を受けた際の対応等が懸念されている。

そんな状況の中、20年程前に火薬を利用した武器の開発をしてはどうかという声が上がり、数年前試作品とも言えるものが完成した。それが大砲である。

大砲が現在の形となつた経緯は（まあ、実物を見たことはなく村に来た行商人に話を聞いただけだが）首都近くの沿岸に置いてあつた奇妙な形の彫像を調べていくうちにその用途が推測され、昔の文献を調べるとその彫像、弾の作成、使用方法が載つていて火薬や鉄を使用し、それを基にして完成にこぎ着けたという話である。

大砲の利点としてはその大きな威力、非力でも使い方が解れば誰でも使えることがあるが、欠点としてはその重量により持ち運び、移動が困難なことにある。

また、技術的、予算的な問題により現在のところ首都にしか製造場所がなく、他の町への移動には時間がかかるため完成した数個は未だに首都にあるはずだが、そこまで考えて声がした。

「ね、ねえ今のついで……」

ネクが不安そうに言つので「大砲だろうな。」

俺が簡潔に言つと、

「やつぱりーでも、どうして！？」

このどうしてには2つの意味があると思つ。つまり

「どうしてってこいつは、どうして海上に大砲があるのか。どうして俺達を、おそらくこの船を撃つてきたか、だな」

もう一つ疑問はある。

聞いた話じゃ大砲ってものの射程距離は最大で数十m、つまり視認はできるがあれだけ離れた距離から届いたのはどういう理由だ？

技術が進歩した？ 短時間で大幅に？ あり得ないだろ。首都にある最先端の技術で漸く固定式、車輪式の大砲が完成したというのは、結構最近の、ここ数ヶ月程度の話だつたはずだ。あり得ないだろ。いや、そんなことよりも、

ド――ーン――!

音がして今度こそ船に直撃したか、と思つたとき、

船より約20m程手前で、砲弾らしき塊が空中で爆発した。見えない壁でもあるよつて。

「えつ、何今の？途中で止まつた？」

「止まつたな。どうしたことだ？」

ネクと同様俺も全く意味が分からなかつたので、だれか説明してくれないかとあたりを見回してみると、

「出来れば使いたくなかったんだけどね。流石この状況がしうがないか。」

リシナが船の後ろ側、もう一隻の船の方向に両手をかざしながらそう言った。

よっぽど困惑訝な顔をしていたのだろう（双子の姉妹は妙に嬉しそうだが）

慌てたようにリシナが続けた。

「つまり、大砲に狙われてると思ったので対衝撃用の不可視の壁を作つたんですよ。」

と照れくさそうに言った。と言われても・・・

「結界術の応用つてことよ！師匠は凄いんだから

双子の姉アリナが胸を張つて言つ。

「結界術？つまり妖術か？」

俺が疑問に思い聞くと、

「古いなあ、言い方が。

昔は確かにそういう風に言われてたけど、師匠は退魔師なの。だから厳密には退魔術つて言つべきね！」

偉そうに言われた。

砲弾を途中で止めたわけか。凄いな。でも退魔術つまり結界術は昔にその技術が失われたんじゃなかつたのか？使い手が居なくなつて

と言つと、リシナが

「ええ。確かにそつなんだけど、うちの家系は代々魔物退治を生業としていてね、様々な技法を研究していく過程でかつて妖術と言われたものの技術を確立したの。」

と言つが、そんなに簡単なものだらうか？

「まあ、とにかく助かりました。ただこちらへ攻撃した輩はまだあそこに居るので、取り敢えずどうしましようか？逃げきれるかどうか。・・・」

アズトがそこまで言つたといひんで、

ブオーーーンッ！
ドルルルルッ！…！

と言つ音がした。

ネクと俺が、

「なんかあの船、どんどん近づいてない？」

「ああ、凄い早さだな。」

見ると先ほど変な音がしてから、船が一いつ瞬く間に早さで接近している。

距離凡そ300m、200m、100m、50m、・・・

乗っているやつの姿が視認できるよくなつたので見ると見たこと
もない格好をしていた。派手な色合の服、身軽そうな格好だ。
それに細長い筒みたいなものを手に持つてゐるが、あれは・・・?

距離30m、20m、・・・

そこまで近づいたとき、

ミシィ！

という何かが軋むような音がして接近が止まつた。

乗つてゐるやつらが慌てたようだが、おそらく先ほどリシナが張つた対衝撃用の壁にぶつかったのだろう。しかし結構な早さでぶつかつて船に傷がないのはよほど頑丈な作りなのか?それにとんでもない早さだった。

あいつら(ざつと20人ぐらいか)が手に持つた筒を此方へ向けた瞬間、

パンツパンツ！

という音が鳴り、見えない壁のあたりに小さい塊が一瞬止まり十数個の塊が海へ落ちた。

あの筒はつまり飛び道具か!火薬を利用した小型の大砲みたいなものか?

威力はいまいち分からぬが・・・

「ダメね。そろそろ限界みたい・・・」

という声ががした。

見るとリシナが青い顔でつらそうにしていた。

「やつぱり、規模の大きな結界を張ると妖力をかなり使うみたい。
と、しゃがみこんでしまつた。つまり壁がなくなつたということだ。
あいつらは間違いなく敵だろうな。しょうがない。」

「ネク、俺ちょっとあっちに行つてくるわ。」

と言いながら、オーラを全身に纏わせて身体の強化を行う。

そして20m程跳んだ。

第10話～疑問～（前書き）

ようやくとうとうあえずの目標十話を達成しました。
これもひとえにご愛読いただいている皆様のおかげです。
今後とも、よろしければ拙作にお付きあい下さい。

第10話 疑問

私は、私という存在を為すものを殆ど全て失った。

あの日から・・・

あの日・・・ウォルス王国、その王族を護る立場である護衛騎士、その隊長であるミーシュール・オルレアンはいつものように王宮に出向き務を果たしていた。武官長会議、部隊編成の相談、王家の食事の付き添い、など本当にいつも通りの一日だった・・・そのまま筈だった。

だが、それは突然起こった。

いや、やつて來たというべきか。

夕食も終わり、1日の責務も別の者との交代時間が近づいていた、ということもあり多少私の気が抜けていたということを差し引いても、私の動搖は護衛騎士隊長にあるまじき対応の遅れに表れていた。王宮内、しかも王の寝室の扉の前にそいつは立っていた。私よりも一回りは小さく見えるその全身を覆う黒いローブを身に纏い、その右手には銀色に輝く杖を持つていた。唯一見ることが出来る肌の部分、両手とフードに隠された顔の下半分は驚くべき白さだった。

如何にしてここに? という疑問、あまりにも唐突すぎる出現、といふこともあったが、何よりそいつのあまりにも異様な雰囲気に私は立ち竦んだ。

明らかな害意らしきものを持ってその場所にそいつは立っていた。だがそれも一瞬のことだ、

「何者だつ！貴様つ！」

と、私がそいつへ向かつて言つといつは

「貴方に用はないわ。邪魔をしないで頂戴。」

と丁寧な口調で言つた。

若い、まだ少女と呼んで差し支えない女の声で。

「貴様つーー」がウォルス王の寝室と知つてのことかつ！

私はそう言いながら背中に背負つたバスターードソードを抜いた。

「勿論。王を消す為にここに来たのだから。面白いことを言つね
貴方？」

「貴様つーー！」

言つと同時に私は約5m程度の距離を一気に飛んで詰め、剣をふりおろした。

だが、

ギインツ！

弾かれた。

何も持つていなかの細い左手で。

「な、なに？」

今起じつたことが信じられなかつた私は、更に剣を振つた。何回も。何回も。

ギインツ！
ガギイツ！
ガイインツ！

しかし、全て左手に弾かれ、防がれる。
何者だ・・・いや、今はそんな場合ではない。
こうなれば、最も強力で速い技を出すしかないと覚った私は、一瞬
呼吸を整え・・・

「セイヤアツ！！！」

銅を狙つた高速の一呼吸での三連突きを繰り出した。

ギンツ！ギンツ！ギンツ！だが、全て左手に全て弾かれた。

「ハアツ、ハアツ、まさかこんなことが・・・この私がこうも簡単
にあしらわれるだと・・・？」

「ふうん。この国の剣技は中々のものね。消すのは少し勿体無いか
しら。」

「さ、貴様！消すとはどういってんだつ！？それに何故王の命を狙
うつー？」

「フフ、消すっていうのは分かりづらかったかしら？文字通り消滅
させるのよ、この国を。何故？決まっているじゃないの、邪魔だか
らよ。王も國も。まあ、他の歯いたえのないのよりは貴方は多少ま
しだったから残してもいいわね。」

と、少女は言いながら

「まあ、貴方とのお遊びに付き合ひのは飽きてきたからそろそろ終わらせるとしましょう。」

そう右言い、手に持つた杖を此方へ翳しながら、

「ファング」

そう言つた瞬間杖が物凄い勢いで太く長くなり、それが私の銅へ伸び私の身体は杖で壁に押し付けられた。

「ガハアッ！」

私はあまりの衝撃に声をあげながら、口から血を吐いた。

「あら、呆気ないわね。まあ、私の波動に触れながら戦えるだけでも大した腕だけだね」

そう言つと少女は杖を元の大きさに戻し左手を扉に向け、扉を吹き飛ばした。そして無造作に中に入つていった。
途端に中から、

「貴様、何者じやつ・ミショールツ！曲者じやつ・ミショールツ！」

といつウォルス王の声が聞こえてきた。

「ウォルス王つ！

お逃げくださいっ！！」

倒れ伏した私は氣力を振り絞つてそう叫んだ。だが・・・

「あや―――――！」

といつ断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

「ウォルス王―――！」

それを聞き私はウォルス王の死を覚つた。

少しして、

「ふう、お掃除終わり。」

と言いながら少女が部屋から出てきた。

「あ、貴様よくも、」

私は倒れた状態で少女を睨み付けながら、そう言った。

「ふふふ。貴方しぶといなだけじゃなく精神力も大したものね。」

何故か嬉しそうに少女が私を見てそう言った。

「殺してやるぞ、貴様あ」

「そうね。そのぐらいの気持ちなりいつか辿り着けるかもね。貴方なら・・・」

「何を言つ、グハア！」

ようめきながら立ち上がろうとした私を少女が杖で打ちさえ、私は意識を失つた。

「まあ、貴方が生き残るかどうか分からぬけど、可能性はあるわ

ね。」

少女は独り、ちて、僅かに微笑した。

「…
目が覚めたとき私は悪い夢を見ているのだと思つた。何故なら目の前には、

「すつきつしたでしょ、う？」

後ろから声がしたが、

「な、なんと・・・い・・・う」

私は振り向かなかつた。

何故なら、目の前の光景に目を奪われていたからだ。

「ど、どひこひことだ・・・こは何処だつ！」

私は混乱しながらも、後ろを振り返り少女に怒鳴つた

「何処？貴方の祖国でしょ？ いえ、正確には元祖國と言つたほうがいいかしら？」

その声を聞き、私はさらに混乱した。

あたり一面火の手が上がり、建物らしきものすらないここが我が国だと？
バカな！

「まあ、信じられないのも無理はないでしょ、うね。でも、」

と、少女が言いながら自分の真後ろを指した。

そこには、先ほどまで自分が居た城があった。ウォルス城が。

「ウォルス城だ……と？」

驚愕に満ちた目で私は城を見た。何故なら、城の周りにあるべきものが何処にもなかつたからだ。

「バカなつ！……」これがウォルス城なら他の建物はつ……町はつ！
城下町はつ！私の家はつ！」

「全部燃やしたわ。人々と一緒に。」

「ふざけるなつ！そんな戯れ言をつ……」

「信じられないのも無理はないけどね。」「やつたのよ。」

と少女は言つと、城へ向かつて杖を翳しながら

「ヘルブレイズ」

と言つた。すると凄まじい規模のそれこそ城ぐらいの蒼白い炎が出
現し、瞬く間に城を呑み込んだ。

「あ、あ、あ……」

「つまりこういう風にしてウォルス王国を燃やしたっていうこと。
理解できた？」

私は目の前で起きたあまりに現実感のない出来事にただ呆然とした。

「あらら、分かりやすく説明したつもりだけど、驚かせたかしら？」

「え、き、貴様は、な、何者だ。な、何故こんな残虐非道な真似をするつ……！」

「何故？先ほども言つたけど、邪魔だからよ。」の国が。それに会いたいモノがあるから。私が何者つていうのは知らないほうが良いと思うわ。もし、いつか辿り着いたら自然と分かることだしね。」

「辿り着く？どういう意味だつー？」

「そうね、可能性がある貴方には辿り着けるヒントぐらいあげましょーか？」

そう言つと少女は少し寂しそうな顔をした。そして、「まず私は、人間ではないの。そうね、この水の大陸や他の大陸での呼称で言えば亜人とか鬼とかデビルとか呼ばれているわ」

そう言つとおもむろに被つていたフードを捲つた。

そこには、長く伸ばした金髪に青い目をした一目見ただけでは人間の少女と変わらない顔があつた。
額から出た角を除いて。

「まあ、見た目の違いと言つても角ぐらいだけじね。あと、年齢で言えば貴方の数倍は上ね。」

「貴様……何処からやつてきた……？」

「言つてもいいけど……今の貴方には決して辿り着けないわよ。
それよりも、」

と、言うと此方へ杖を翳してきた。

「私を殺すつもりか？」

「まさか！折角可能性がある人に会えたもの。ただ今の貴方じや駄目ね。もつと強くなつてもらわないと」

と、私の周りに光る文字が浮かび上がってきた。

「な、なんだこれは！」

「転送魔方陣よ。今から魔法で貴方を何処かの大陸に飛ばしてあげる。ちなみに貴方を倒したのも、城を燃やしたのも魔法によるものよ。」

「魔法だ・・・と？」

「そう。私は太古に失われた筈の魔法を使えるの。ひょっとしたら貴方も使えるようになるかもね。」

「ま、まで！私を何処へ！」

「さあ？まあ、人が居る大陸だとは思つけど。じゃあ、さよならね。再会を期待しているわ」

そして身体が光ったと思った瞬間、私は意識を失った。

目を覚ましたとき私は山中に居た。

そして人の悲鳴を聞いた。人が居ることと悲鳴の原因が気になりその場所へ行つてみると、1人の男が大きな一頭の熊に襲われていた。幸いなことにと言つべきか私の騎士の鎧と愛剣は装備したままだったので、すぐさま熊を倒すことができた。

男に事情を聞いてみると、隣村に行商に行く途中に熊に襲われたしい。

現在自分の置かれた状況を把握するためその男と色々な話をした。どうやら、ここは火の大陸という大陸らしい。1日で様々な信じがたいことが起きすぎて頭が麻痺してしまったらしい。疑うこともなく私はその話を信じ、他に当てもないので男と共に行動させてもらうことに頼んでみた。

用心棒が欲しかつたらしい男は一つ返事でその申し出を了承した。

男の名はアズト・ミタラと言つた。

／＼＼

3ヶ月程前に自身に起つた出来事をミショール（今は偽名としてミシリル・タイナを名乗つている）は思い出していた。

思い出す契機となつたのは先ほどの光景にある。

リシナと名乗つた女が見せた技、あれこそあの少女が使つていたような魔法ではないのか？

呼び方は違うみたいだが、共に人智を越えた力という点では似たようなものではないのか？

それに、トウヤとか言つたか。あの少年は今、身体が光り普通では考えられない距離を跳んだが、あれも魔法の一種ではないのか。この大陸には魔法が伝わっているのか？

当初アズトから鬼の巣窟に行く話を聞いたときはあの少女や魔法に

関して何らかの手がかりが得られるかも知れないかと思つたが、思
わぬところから手がかりが得られそうな感触があり、ミショールは
密かに唇を歪めた。

（）

船に飛び降りた途端乗っている奴らが手に持っている筒を俺の方へ
向け、何かを飛ばしてきた。火薬の臭いがしたので、おそらく大砲
を小さくしたような物だと俺は見当をつけた。
その武器らしき物からはかなりの速さで塊が飛んできた。
だが、オーラで強化している俺の身体には傷一つつかない。
すると、

「何故だつ！何故大砲も銃も効かないつ！！」

と、一人の男が言った。

「と言われてもな。大した威力じゃないしな。全然効かないが。む
しろお前らに聞きたいがお前らは何者だ？あと何故俺たちを狙う？」

俺が聞くと、男は

「貴様のような小僧に話すことはないつ！死ねつ！」
と、憲りずに手に持った筒（多分銃というのだつ）を此方に向け
て、塊を飛ばしてきた。だが、

「いや、だからその攻撃は効かないって言つてるだろ？そんな無駄

な」とをするよりも「

と、塊を弾きながら俺は剣を抜きその男を斬った（手加減は一応した）

男は倒れ、他のやつは驚いた顔をしていた。「俺達を攻撃しているつもりなら俺は降参を薦めるぞ。」

と言いつつさりに近くに居た数人を斬った。

「質問に答えないなどんづらお仲間がやられるぞ。」

「う言ひと」の中で一番歳上らしき男が答えた。

「俺達は探索者だつ！失われたものを探している。貴様らを襲つたのは先を越されないため排除しようとしただけだ！」

「探索者だと？失われたものとはなんだ？それにお前らの技術だ。この船は何だ？何故大砲がついている？それにこの船はいつたい何故あんな速度が出せる？」

俺は気になっていたことをまくし立てた。

「UJの船はレビュアス国で最新鋭のモーターと武器を積んでいる。失われたものとは太古の・・・」

男はそこまで言つて後ろの男達と何やら話しだした。

「キャプテン・・・どうやって・・・」「

・・・手持ちの武器だけじゃ・・・

「逃げるにも・・・」

「・・・いつそのこと・・・」「

と話していく声が聞こえる。俺は、何となく納得できず、

「つまりこういうことか。お前らはとあるものを探している探索者で、それを手に入れるため目的の場所つまり鬼ヶ島に行こうとしたところ、先に俺達の船が見えたんで先を越されまいと、この大砲を積んだ船で攻撃してきたというわけか。それにしてもレビューアス国とは・・・？」

と言つた。

「あ、ああそりゃ。だが鬼ヶ島だと？あの島は何らかの加護を受けているとはばずなのだが？」

「加護？ああ、加護といつ言い方をするならこの大陸は火の神剣の加護を受けているぞ。」

と俺が言つと、男は

「火の大陸だと！？バカなつ！？そんなばずはつ！？な、なら・・・我らは・・・間違つたというのか・・・」

驚愕に満ちていた。

「ん？火の大陸ならまづいのか？」

不思議に思い聞いてみると
「貴様には関係ない！」

と、焦つていた。その態度に軽くムカついたので、

「そりゃ、何を間違つたかよく分からんが残念だつたな。
ただ、別に心配しなくていいんじゃないかな？」

軽く深呼吸し、

「お前らはこゝで全滅するんだから、なあつ……」力を込めてオーラを放つてみた。

結果、
グォオーッといつ音とともにオーラの奔流がその船の男たちを襲つた。

（）

直接怪我こそしないまでも、その少年から進る「プレッシャー」により
我が船の乗組員達は立つこともままならなくなつていぐ。
これはなんだ？圧倒的な力を感じるが・・・」のままでは田的を果たせないまま・・・それだけはつ

決して目の前の少年に勝てないことを覚つた私は、

「また、まつてくれ。君達に服従する―だから助けてくれ―」

命乞いをした。
すると、

「へえ、判断が早いな。
プレッシャーが止んだ。

「まあ別に殺す気はなかつたけどな」

「とにくぐ、あんたらの存在とか目的とかが分からなさず。服従とかはどうでもいいが、知ってる」と全て喋つてもうおつか？」

「あ、ああ。私も知りたいことがあるしな。勿論話せ。」

「こうなつたら仕方ない。本来他国の人間に言つべきではないが……あの島にはあれは存在しない可能性が高いが、命を失うよりはまだ。まあ、殺されなかつたかもしれないが……」

「とつあえず、その手に持つてる物は渡してもうおつか？」

「勿論だ。そもそもこんな物では君に傷一つつけられないしな。おいつ！」

私は、乗組員に銃を渡すように促した。それを袋に入れ少年に全て手渡した。

「俺より遙かに色んな知識を持つた奴があつちには居るからあつちで話そ。あつちまで船を寄せて乗つてくれ。あんたに危害は加えないから」

「ああ、分かつて。ただその前に一つ聞かせてくれないか？」

「ん、なんだ？」

「先ほどの君の力、あれはいつたい……？」

「ああ、あれはオーラだ。一応説明すると、オーラっていうのは人が体内に秘めたエネルギーのことだ。それを体外に出し自分の力として肉体を強化したり、具現化したり、放出したりするなど色々な使い道がある。」

「そうか、あのプレッシャーはそういうことか・・・それで銃も効かなかつたのだな。」

「やつぱりあれは銃っていうのか。それはともかく俺もあんたに聞きたいことがある。」

「なんだ? この期に及んで隠し事はしない。」

「先ほど言っていた(失われたもの)とは一体何だ? 気になるんでとりあえずそれだけ教えてくれ?」

なるほどと私は頷いて、

「その失われたもの、というのは、つまり太古に存在していたとされるものだ。」

「太古に存在していた?」

「ああ。実物を見たことはないが、私の国レビュアスでは建国当時よりそれを崇めている」

「崇める? つまり火の大陸で言つところの神剣みたいなものか?」

「神剣? 七つの神のことか?」

「そうか・・・火の大陸では剣として伝承されているのか。まあ、どちらが正しいのかは判断のしようもないが。」

船が少年の船に接した。

「いや、1人で頷いてないで説明しろよ。何を崇めていたっていうんだ?」

「神だよ。ただ火の大陸と違い、剣ではなく獸じそだがね神獸しんじゆと呼ばれるものだ」

「神獸?」

「そうだ、神獸レヴィアタン、水を司るとされている伝説の獸だ。そこまで話したところで、私は少年と共に少年の船へ移動した。」

第11話「探索者たち」（前書き）

大した違いはないですが、サブタイトルが今までより少し長くなつたりします。

第1-1話「探索者たち」

（）

『大いなる守護者により、この地は護られている。

かつて大地は荒れ果て、海は猛り、およそ生物と呼べるものはその存在さえ叶わなかつた。

だがある日、この地に神が舞い降りた。巨大な水龍に姿を変えたその神の御力により、川は流れ出し、大地が潤い、生物が生まれ落ちた。この地と肉体を分けた彼の6大陸と共に。

我らは決して忘れてはならない。今こづして我らが在るのは水神の御加護によるものだということを』

レビューアス国聖書より抜粋

（）

「つまり、その祈祷師きとうしとやらの御告げに因つて、貴方達はこの島を目指して来た、というわけですか？・・・しかも私達を略奪者と勘違いして攻撃してきたと？」

アズトは憤慨しながらそう言つた。まあ、怒るのも無理はないだろう。こちらからすれば、いきなり大砲をぶっぱなされて殺されかけたのだからな（リシナがいなければ間違いなく船に直撃していた）

言われたガルディアは、

（先ほど自分のことをレビューアス国レビューアタン探索団団長ガルディア・ソーヴと名乗った）

「そのことに関しては申し訳ないとしか言い様がない。だが、我が国が置かれた状況も察していただけると助かる・・・」

若干すまなそうに言い訳がましく言つた。口だけならなんでも言えるからな。それにしても、

「まあなんだ、その隣国のウォルス王国だつてか？そこが一夜にして壊滅、いや消滅して、早急に対応策を練る必要性があるっていうのは分かるが、他にやりようがなかつたのか？」

と、レンジが疑問に思つたことを言つた。

「他に」と言つてもな・・・我が国の王や知恵者、科学者などが全員で相談しても一体何が起つたのか見当もつかない様子だつた。」

ガルディアは答える。

が、俺は改めて考えた。

そんなことがあり得るのだろうか？

聞いたらウォルス王国というのは、国土こそ火の大陸の5分の1もないが、人口は約10万人程度しかも文明は明らかに火の大陸より進んでいるであろうレビュニアス国と遜色ない程度だつたということだ。建物も木造はあまりなく土を練つた硬く燃えにくく崩れにくい材質だつたらしい。

もし、ガルディアの話が本当だつたとしたらどうやってそんな状態になつたのか全く見当がつかないというのは理解できる。

「襲われたことはともかくとして、あの島に何かありそうなのは確定だな。」

俺はそう納得した。いや、おそらく俺以外も皆納得している。が、

「いやいや、それは確かにそうかもしれないけど…でもこいつらはあたしたちを殺そうとしたのよー！」

ネクがガルディアのほうを見ながら興奮した様子で文句を言つ。

「まあ、さうだけじゃなあ。でも、こいつやつてみんな無事だったし。それに正直鬼ヶ島で何があるかは全然分かつてない状態だから少しでも戦力はあつたほうがいいと思うぞ？しかもレビュニアス国の中は大陸に持ち帰つたら丸を稼ぐよりも割がいいんじゃないかな？」

「…」

俺の説得（？）によりネクは納得できたのか口をつぐんだ。すると、

「いやあ、それにしてもトウヤさんがあれだけ強いとは思いませんでしたよ。」

アズトが妙にこじこじながら言つた。

アリナが、

「そうね、ちょっと離れててよく見えなかつたけど、それでも凄い速さで動いてた。何人も一撃で倒してたし。いきなりあの距離を跳んだときは一瞬何が起つたか分からなかつたよ。」

と、言つた。

俺はそこまで本気でやつたわけでもないし驚かそうと思つてやつたわけでもないのだが。とりあえず一件落着したからよかっただんじやないかな。

横でガルディアが苦虫を噛み潰したような顔をしているのはさておいて、

「まあ、さっさと行つて片付けたほうが安全だと思つてやつただけなんで。それよりもリシナさんのほうが凄かつただろ？」

「師匠はねえ。確かに凄いけど、もうその凄さに見慣れたつていうか・・・師匠なら間違いなく何とかしてくれるつていうか・・・特に驚くことでもないんだよね。」

そう誇らしげにリシナのほうを向きながら言った。

「私も大砲ぐらいなら何とかなると思つてましたからね、退魔術で。ただ、防いだあとはどうしようかと考えてなかつたので助かりました。」

此方を微笑みながらリシナがそう言った。

「まあ、こいつらの遭遇に関しては、降伏したんだしこのまま上陸して一緒に調査をしたあとで考えたらいいんじゃねえか？」

レンジがそう言つて、リクオが、

「そうですね。ただ単に割のいい仕事だと思つてたら雰囲気が怪しくなつてきたんで、仲間は多いほうがいいですね。」

「と言つた。話を聞くうちに光の正体がいよいよ得体の知れないものに思えてきたのだろう。神獣つて。
俺も神獣をどう調べればいいのかせつぱりだしな。

「ああ。此方は殺されても仕方ないぐらいのことをしたので、殺されないのでなら勿論協力させてもらつ。正直な話を言えば大幅な戦力増強になるのでとても助かる。」

ただ・・・

ガルディアが言いにくそうにしたので、

「なんだ？」

レンジが促すと

「島内を調査したあと、もしその光の正体がレヴィアタンだつたら、我々を解放してくれないか？国に戻りどうしても報告しなくてはならない。

勿論相応の見返りは支払う。現在、我が国は大変押し迫った状況にある。平たく言えばいつ得体の知れない輩に襲撃されるか気が気がではないのだ・・・だからどうしても結果を報告する必要がある。」

「うーむ・・・どうするよ坊主？」

レンジが何故か俺に振った。坊主って。俺はそんなに子どもに見えるのか？

確かに、実際に降伏させてこの船に連れてきたのは俺だから分からなくはないが・・・しうががないな。

「いいぞ、ガルディア。解放してやる」

「ほんとかつ！感謝する！」

「ただし、俺も連れていけ。他の大陸それも文明が進んだ大陸を見てみたい。」

「あ、ああそれは構わないが、あの最新式の船でも片道で約1週間かかるぞ。国でも用事を済ませるのに少なくとも10日ぐらいはかかるから」「ちらへ連れ帰るのは一ヶ月ぐらいはかかるぞ。いいのか

？」

「ああ、構わない。」

「あたしも行くつ！相棒のあたしも忘れないでよね！」
急にネクが言い出した。相棒つてお前・・・この仕事が済んだら別行動しようと思つてたが、別に断る理由がないな。

「だそうだ。ガルティア、いいか？」

「大丈夫だ。」

「あのー、私も連れて行つてもらえませんか？それともう一人。」
今度はアズトが言い出した。ガルティアとミシルのほうを交互に見ながら。

「アズト？あんた仕事はいいのか？」

「いや、むしろ稼ぐために行きたいんですよ！そもそも水の大陸まで行くにはカグツチにある最新式の蒸気船でも片道一ヶ月は早くてもかかりますからね。それに伴う費用が尋常じゃないのですよ。ガルティアさん、あの速度と大きさの船なら少々の荷物は大丈夫ですかね？」

「ああ、人があと何十人か乗つても余裕がある。その点については問題ない。」

「じゃあ、よろしくお願ひしますっ！」

旅費やら護衛費がかからず莫大な費用を使わずにいける、とか言うアズトの声が聞こえてくるが、気にしないことにした。

ガルティアがミシルを見て

「その男もだな・・・全部で4人か。まあ、こちらとしては断われる立場でもないし、特に問題はないのだが・・・それとは違つちょつとした疑問といつか謎といつか・・・」

言つべきが言わざるべきかといつ風にガルティアが言い淀んでいたので、

「どうした、ガルティア？どうこいつなんだ？」

聞いてみると、

「いや、な。その男、もしかしたら水の大陸の者ではないかと思つたのだが。」

と、ミシルを見ながら言つ。

「何故だ？」

「つむ。先ほど言つた水の大陸の国の一つウォルスの騎士があの男が持つてゐるような大剣を好んで使つていてからな。ただウォルスはもうないし移動手段やウォルスの国交を考えてもこんなところに居るはずがないと思つてな・・・」

こいつは水の大陸から来たのか？と思つてミシルを見てみたが、

「・・・・・・」

ミシルは何も言わなかつた。

「ま、まあそれはどちらでもいいじゃないですか？そんなことより

も時間が惜しいので早く島へ行きましょう!」

アズトが僅かに慌てたように言った。確かに早くしないと時間がもつたいないな。夜になつたら調査どころじゃないし。

皆が顔を見合せ頷き、

ガルディアが、

「お前ら島へ行くぞ! …」の船に付いてこいつ…

自分の船へ叫んだ。

（＼＼＼

あのガルディアという男、そう言えば何年か前に見たことがあるな。レビュアスのウォルス担当の行商人のお供か何かだつたか。先ほど黙っていたのは別に素性を知られたくないとかじやなく、単に我が身に起こつたことを説明できなかつただけだ。いや、できなかつたというよりむしろ説明しても信じないだろうと思つたからだ。特に不都合はない。

それにしても神獣か・・・あの少女もその類のものだつたのかもしれないな・・・

ミシエールはそこまで考え他の者と一緒に上陸の為の準備を始めた。

（＼＼＼

そして、

俺達は漸く鬼ヶ島へ上陸した。総勢20人。

ガルディアの船には19人乗つていた。その内何故か未だに立てないやつが5人その看病で1人もう2人は船の管理、整備のために残

した。つまり上陸したのはガルディアの船からは11人（銃はとつ
くに返している）、俺達は9人だ。

話してみて俺達を殺すよりは（無理だろうが）協力したほうが遥か
に効率的だと考えたのだろう。皆協力には納得していた（俺のほう
を見て若干怯えていたが）

そして、調査の効率を上げる為に班分けをした。

もし戦いになつた際に強さや連携、親しさのバランスも考えた結果、

1班

俺、ネク、アズト、ミシルガルディア（この期に及んでないとと思う
が万が一の裏切りに備えて俺と一緒にした）

2班

リシナ、アリナ、ユリナ、ガルディアの仲間二人

3班

レンジ、リクオ、ガルディアの仲間三人

4班

ガルディアの仲間五人（一人は副団長とか言つていた）

以上の五人ずつ4つの班に分けて、東西南北へそれぞれ進むことにな
した。

再会は船があるここで3日後の予定。もしそれまでにもどれそうに
ない場合は合図を送る（火薬を利用した技術で狼煙という物をガル
ディアからもらつた）ことにした。

さあ、行くか！

鬼が出るか神獣が出るか？楽しみでしようがない。

探索者20人は4方向へそれぞれ歩き出した。

第1-2話「守護者」

己の領土内に侵入したモノを感知したソレは、数百年の間何回か繰り返した作業を行うため、侵入したモノの方角へ移動を開始した。金属の身体を持つソレは錆びることなく、壊れることなく、今から己のやることに疑問を持つこともなく、いつものよつて口ひごえられた唯一無二の義務を果たそうとするだけだった。

己の義務、すなわち侵入者の排除を・・・

「そ、殺風景といつか何という、か・・・行けども行けどもおかしか、み見えませんねえ。はあ、はあ。ほんとにこの島には何か住んでいるので、しょうか、ふう、ふう。歩くのが、け、結構きつく、なつて、きましたよ。ふう、ふう」

アズトが息を切れ切れにさせながら横から言つてきた。出発してから小一時間ぐらいは経つたとは思うが、まだ大して進んではないぞ。でこぼこした岩山を登つたり降りたりしてるのでそんなに息切れしなくとも。

ただ、歩くだけで暇なんで

「そうだな、ここまで進んで分かつことと言えば、このやたらと続く岩山には生き物が居ないっていうことと、アズトが意外におっさんだつたつてことぐらいか・・・」

真面目な顔で軽く言つてみると、

「わ、私の体力がないのはべ、別に歳のせいじゃありません！いや、商売で、それなりに色んな僻地へ、行つたりするんでむしろ体力はあるほうです！そ、そもそも私はまだ29です！」

と、やたらと興奮していた。おっさんは禁句なのか。

「まあまあ、落ち着いてアズトさん。どうせこいつのことだから暇潰しにおちよくなつただけだと思つわよ。だから、あんまり気にせずに。

」

とネクがとりなすように言つた。付き合い長いだけあって俺のことがよく分かつてゐるなこいつ。

「むう。それはそれで何か納得が行きませんが・・・」

アズトが唸りぶつぶつ言つていた。

ちなみにガルティアとミシルは何も喋ららず黙々と歩いている。

「ま、あたしはこいつの言動に慣れてるからね。多少何か言われても気にしないけど。」

ネクが何故か自慢げにそう言つとアズトが、

「ですか。やはり夫婦ともなると性格も何を考えてるかもよく分かるものですね。」

うんうんと何か一人で納得していた。ん？聞きましたか？今、

「べ、べ、別にこ、こいつとあたしはふ、夫婦なんかじゃないわよ

つ！か、勘違いしないでよねっ！ねつ？トウヤツ？

そう、やつぱり夫婦って言つたよな。そんなバカな。それにしてもネクもそんなに顔を真つ赤にして怒らなくてもいいんじゃないかな。よつほど夫婦と言われたのが気に入らなかつたんだろうな。よし、

「そうだぞ、アズト。どう見たら俺達が夫婦に見えるんだ。俺達はただの幼馴染みだ。」

フォローしどかないとな。

「・・・そ、アズトさん。あたし達はただの幼馴染みよ・・・」

何故か頃垂れながらネクがそう言つた。

と、ガルディアが

「一つ氣になつたんだが、君たちは見た目に反して結構年齢が上なのか？」

聞いてきたので、俺が、

「見た目に反してつていうのは氣になるが・・・俺は15歳だ。ネクも。」

言つとガルディアが、驚いたように

「そ、そ、うか。やはりそのぐらいか。アズト氏が夫婦と勘違いするからてつきり20歳前後ぐらいかと。」

「ん、といふことはレビュアスではそのあたりの年齢にならないと

結婚できないのか?「

聞いてみると、

「ああ、正確には18歳からだがな。」

「なるほどな。ちなみに火の大陸では15歳からだ。そのへんの決まり」ととか、文化の違いも興味深いな。」

そうやって俺達は互いの文化の色々な違いなど様々な話をしながら岩山を進んでいった。

そつこいつするうちに漸く岩山の切れ目が見え、岩山を降りた先にはやたらと広い平原に辿り着いた。平原の向こいつ側に森らしきものが見える。

「やつと皆曰がおわりましたね!」

アズトが本当に嬉しそうに言つた。

「確かにやたら長かつたな。まるで・・・」

ガルディアが何やら考えこんでいる。気になつた俺は「ん?どうしたんだ、ガルディア?何か気になることでも?」

「いやな、岩山がいくらなんでも長すぎたと思つてな。まるで、外部からの侵入を防ぐよしな・・・要塞みたいな島の構造だと思つてな。」

「ああ、なるほどな。言われてみれば確かに。あの岩山なら馬車は確実に使えないし、外から狙撃つていうのも難しそうだな。」

俺が同意すると、アズトが
「いよいよこの島に何か住んでいる可能性が少なくなつてきました
ね・・・この島から他の場所に移動をするのに手間がかかりすぎま
すからね。」

若干落ち込んだように言つ。

「まあ、まだあの森の奥とかに誰かいるかもしれないから諦めるに
は早いんじやないか？光つたと思われる場所も見つかってないしな。
」

少し可哀想になつて俺は言つた。アズトにしたらこのまま何も見つ
からずには手ぶらで帰つたら大損害だろつからな。まあ、まだ日にち
もあるし、
とガルディアが

「おそらく大丈夫だとは思うが。祈祷師が指示した場所の信憑性
は高い。確実にこの島に何かはある。生き物もいないうような場所を
指示示すというのは考えられない。

今まで一切生き物を見ていないというのは確かに気になるが・・・」

「まあ、諦めるのは島内を隈無く探して何も無いと分かつてからで
いいんじゃないか？今はとにかく先にすすむ」

そこまで言つたところで、俺は何かとても嫌な雰囲気を感じた。の
で平原の半ばあたりを見てみると、いつの間にか見たこともない、
銀色の物体が立っていた。それを見た瞬間ざわつ、と背筋が粟立つ
ような感覚を覚えたので、

「みんなっ！伏せろっ！
俺は他のやつへ叫んだ。

（）

ソレは森の中から平原を挟んだ向こう側の様子を見ていた。岩山に何者かが入った途端感知可能な己のセンサーが感知したとおり、岩山を越えて侵入者が平原まで辿り着いていた。

数は五体。平原の距離は凡そ700m程度。己の侵入者排除機能の射程距離は500mはある。

常ならば平原を半ばまで進んで待ち構えておき侵入者が岩山を降りると同時に排除機能を使用する。だが今回は侵入者を感知してからここに辿り着くまでがいつもより遅いのか侵入者を視認したときは己はまだ森の中だった。

何かいつもと違う点があるか？一瞬そういう考えが己の回路にうかんだが、すぐにそれを打ち消し、自動で目標つまり侵入者が射程内にはいるように音もたてずに移動を開始した。

そして平原も半ばまで進んだソレは侵入者へ向けて排除機能を作動させた。

（）

俺の焦った声に何かを感じ取ったのか皆が一斉にその場に伏せた。と同時にその銀色の物体の銅あたりから青く光り輝くものが照射された。先ほどまで俺たちが立っていた高さの場所に。

伏せおかげでその青い光は誰にも当たらなかつたが、俺たちの後ろに立つ岩山に当たり岩の表面が抉れていた。

「い、今のはいつたい？」

「伏せなかつたら明らかに致命傷を負つっていたぞ。」

アズトとガルディアが伏せながら話しているのを尻目に俺は銀色の物体へ向かつて駆け出した。

距離がだいたい300～400mか。10秒ちょっとはかかる。

ソレは最初、己の認識機能に異常があるのかと思考した。かつて己の侵入者排除機能「イレイザー」を使用して斃れなかつた侵入者などただの1体も存在しなかつた。だが今、イレイザーを使用する直前に侵入者の5体はまるでイレイザーが当たる位置を知つていたかのように地に伏せかわした。それどころかその内の1体は凄まじい速さで此方へ近づいてくる。

ソレは再度レイサーを放つた。その近づいてくる一休へ向けて。

丸太を2つ立てて、縦に繋ぎ（太さは丸太よりは一回り太いぐらい）それより細い棒を人でいうところの手や足の位置に生やしたような感じの形の（長さは丸太1mずつぐらいい手足の位置にある棒は70～80？）銀色の物体が此方へ向けて先ほどのように青い光を照射しようとしている。

一気に走って距離は凡そ10mぐらいまで詰めたが走りながらじや回避が間に合ひそうにないな、これは。

思った瞬間、光が再度照射された。

煙が巻き上がり視認が不可能だが、この至近距離からのイレイザーなら確実に捉えた、と判断しさらに他の4体を排除するためにソレ

は岩山のほうへ進んだ。

否、進もうとした。

だが、

近づいてきていた1体が先ほどと変わらぬ姿でそこに立っていた。そして己がその姿を認めた瞬間、その1体が一気に己の頭上まで跳んで近づくと同時にそれまで腰に差していた金属を振り下ろした。その瞬間ソレは思考する機能を失った。

（）

オーラの使い方には大別して2つある。

1つは自らの体内から練り上げたオーラを使い、身体の筋肉や神経、手持ちの武器防具を強化し攻撃力や防御力、速さ等、威力を底上げする方法（体氣術と呼ばれている）

もう1つは、自らの体内から練り上げたオーラと大気中に浮遊している精氣（プラーナと言われるもの）を混ぜ合わせ、自らのオーラのみよりも強大な威力を發揮できる方法がある（大氣術と呼ばれている）

（）

俺は銀色の光の照射が此方へ当たる直前に大気中の精氣と自らのオーラを混ぜ合わせた大氣術を使い身体の防御力を大幅に上げたため、光の直撃を受けても特にダメージはなかった。さすがに自分のオーラだけで受けてたら立ってられなかつたかもな。それにしても・・・

「それは一体何なんでしょうね？見たところ大きな金属の塊にしか見えませんが……」

と、いきなり攻撃してきた銀色を倒した後、安全を確認して後ろに居た他のやつを呼び寄せ、考え方をしながら来るのを待っていた俺に追いついたアズトが尋ねてきた。

「ああ。俺も遠目にには変わった生き物が居るぐらいにしか思ってなかつたが、近くで見ると……何だこれ？真つ二つにしたが、血らしきもの出でないし。ガルディア、これが何なのか分からぬいか？」

俺は銀色を指しながら、同じように合流してきたガルディアに尋ねてみた。

「いや、レビューアスでもこのよつなものは見たことがない。ただ……」

「ただ、なんだ？」

「金属が動く、といつのは見たことがある。」

「ふーん。これとは形が違うのか？」

「そうだ。まだ実用化の目処は立っていないが、自走式貨物車と呼ばれるものが現在研究されている」

「自走式貨物車？それを木じゃなくて金属で作るのか？」

「そうだ。木よりも頑丈で腐りにくいからな。ただ自走式ならではの馬力がある大きな動力装置を使う必要上、どうしても本体を巨大にしなくては作れない。そんな巨大な貨物車を何処にどうやって移動させるかというのが現在の課題だ。それにそこまで詳しいことは分からぬが、仮に作れたとしても前後に移動する、といふ機構を組み込むぐらいが限界だろうと思つ。だから・・・」

「仮にこれが金属だとしたら、どうこいつ仕組みでこの大きさで自走し、しかも攻撃までできるかといふのはまったく分からぬな・・・」

「やうじいじいじだ。それにしても、トウヤ。」

探索者というのはやはり好奇心旺盛なのか、俺が真つ二つにした箇所を色々な角度から眺めたり触つたりしながら話していたガルディアが不意に俺を振り返つて言つた。

「なんだ。」

「やはりトウヤの強さはめちゃくちゃだな。この金属は鉄ではないにじろそれに近い固さだぞ。それをこんな風に剣で綺麗に真つ二つにするとは・・・」

「やうか？そのぐらいの固さならネクも出来るぞ？なあ、ネク？」

俺の横にいつの間にか立っていたネクへ話を振つてみると、

「えつ？あ、ああ、うん。鉄ぐらじの固さだったら斬れるわよ。」

「だよな。通常でも鉄ぐらいは斬れるよな。」

この場合の通常とはオーラやプランを使わない状態のことと指す。すると、ガルディアが

「なんというか・・・火の大陸ではそれぐらいの剣術の腕は当たり前なのか?レビュースでいうと、騎士並みの実力だぞ。いや、騎士でも何人が斬鉄ができるか・・・」

鉄を斬ることを斬鉄っていうのか。そのままだな。
一応補足しどくか。

「いや、火の大陸全部じゃないと思うぞ。俺たちの出身の村では剣術が盛んだつたつてだけだ。」

「いや、それにしてもその若さで・・・凄まじい腕だな・・・」

何かガルディアが落ち込んでいる。まあ実際俺の腕を田の当たりにしたからな。

「むつ?これは?」

と、ガルディアよりも念入りに銀色を調べていたアズトが何かを発見したような声を出した。

「どうした、アズト?何か見つかったのか?」

聞いてみると、

「ええ。全身銀色の金属なのにここのだけ色が違つてよく見ていたんですよ。」

と言つて丸太の繋ぎめあたり、人でいうと丁度臍のあたりになるのか。

よく見てみると、そこには

「宝石？」

赤く輝く真つ二つになつた宝石らしきものが埋め込まれていた。

？？？

「守護者がやられただとつ！」

「いえ、やられたかどうかは分かりません。正確には反応が途絶えたのです。」「反応？精石の反応か？」「はい。通常ならば精石の反応が途絶えるのは考えられない事態です。私もこの250年間の話を色々と知つておりますがそのようなことは初めて聞きました。」

「そうだな。確かに俺も初めて聞いた、反応が途絶えるなど。」

「ですから考えられるのは、精石自体の効力が長年の酷使により切れたか、侵入者がこの島に入り守護者を倒し精石を壊した、という2つの可能性です。」

「前者は考えづらいな。口伝に因れば精石はブランーナを取り込み半永久的に使用可能らしいからな。だとすると、やはり・・・」

「侵入者ということになります。」

「しかしつ！あの守護者だぞ。そう簡単にやられるか？」

「分かりません。ただ、もし守護者すら倒せるような侵入者がすでに大平原あたりまで迫つてゐるとなると・・・」

「ここまで来るのは、あと1日つてところか。あいつらはどうした？」

「あの2人はいつものように島内を散策してますよ。」

「またか・・・こつ帰つてくるかは、分からぬいよな・・・？」

「見当もつきません」

「はあ――――」

「溜め息は女性が逃げますよ。」

「そこは女性が、じやなくせめて幸せが、にする配慮をしりつー。」

「それはともかくこの守りは手薄ですね」

「ああ。侵入者の目的は分からんが、守りを固めんとな・・・」

「目的はほほ間違いなくあれだと思ひますが。」

「それは言つくな！もしかすると違うかも知れないだらうが」

「・・・」

「分かつた。あれが目的だと認めよう。だからその田をやめりつー。
「あれだけは何としてでも護らなくてはなりませんからね。下らな
い現実逃避はやめてください。」

「お前は本当に厳しいな。ああ、分かつてゐる。あれだけは何として
でも護るだ。」

「勿論私も護ります」

そこまで話すと2人は自分達が今居る神殿、その中央の祭壇で体長
50?程度の光輝く獣がすやすや眠つているのを眺めた。

（）

第1-3話～柱～（前書き）

最近はどうも時間が取れずに投稿が遅くなりがちです。

クロカゲ家は元々護衛を生業としている。

アリナとユリナの父親は2人の娘が物心ついた時から同じように護衛の為の術を教えているが、双子とは言え生来持つて生まれたものが違うのか、成長するに従いその2人の性格と共に能力、性質の違いがはつきりと表れ出した。例えばアリナの場合は運動神経が良く格闘も出来るがユリナはあまり良くなくあまり戦いには向いていない。アリナにはオーラの流れがよく見えないが、ユリナは自分の人よりも良く見える。などとわかりやすいところで例が挙げられる。

鍛え方としては、父親は初めの頃こそ同じように教えてはいたもののお互いが出で結果に余りにも偏りがあるため、やり方を変えてそれぞれの長所を伸ばす方針にした。その長所つまり本人達にとっては得意なことのみをやった。その結果、12歳になる頃には、アリナは格闘や何種類かの武器の使い方を、ユリナはオーラを利用するための基本的な下地が出来ていた。とは言えまだまだ、発展途上にある2人をさらに上達させるため、甘えを無くすため、あわよくばお互に足りないものを身に付けさせるため、知り合いの家へ2人とも預けることにした。

預けるには理由があつて、まずそこが心安い知り合いの家だということ、そしてその知り合いは退魔術という戦いや魔物退治に大きな対抗手段を持つて生業としているからである。

リシナ・トゴウが預けられた2人の少女を現役退魔師である父親から面倒を見るように言いつけられて、自らの身に付けている術を教えたのにはそういう経緯があった。

「一しょう。ししょう。」

初めて二人の姉妹が家に弟子入りしに来た時のこと振り返りながら歩いていると、後ろから声をかけられた。

「なにかしら？」

リシナはアリナのほうへ向き直り尋ねた。

「うん。さつきからユリナが結構きつそうで・・・出発してからもうかれこれ2時間は歩きっぱなしじゃない?もつもろそろ・・・」

アリナが遠慮がちにユリナのほうを見ながら言つ。

「そういうばあ、ごめんなさい気づかなくて。なら、そろそろ休憩にしましようか?お一方もそれでよろしううか?」

アリナと少し顔色の悪いユリナへ声をかけ、さらに後ろから歩いてくるレビューアス団の男性一人にも尋ねてみた。

「我々は、貴女のご判断にお任せします」

と一人が言つので、休憩を取ることにした。

「それにしても、何もない場所だね。ほんとにこの島に何かあるのかな?」

アリナが周りを見渡しながら言つた。

「そうね。上陸する前に見た感じだと島の両端が見えないぐらい広かつたから、相当な広さだと思うわ。4班に手分けして探すというのは正しい判断でしょう。アリナちゃんが言うように何もないかもしれないわね。それに3日後には入口まで戻らないといけないから、あまり奥深くまでも進めないわね。」

私がそう言つと、

「・・・でも、生き物の気配もない」

多少体力が戻ったのかユリナが言つた。

「そうね。それは私も思ったわ。いくらこんな道でも虫とか小動物が居てもおかしくはないわよね・・・」

私は、歩いてきた荒れ果てた道を見ながらそう言つた。無人というのはともかく生き物一体いないというのは不自然、というより変だ。

まるで、

「・・・まるで結界が張つてあるみたい」

ユリナがそう言つた。やつぱりそつ思つわよね。そもそもトゴウ家の退魔術というのは、魔物を退治するよりもどちらかといえば不可視の物理結界を張り魔物を押しとどめたり封印したりするほうに本領を發揮する。なので、結界術や封印術の修行を重点的にすることになるため、自分でできるようになるのはもちろんのこと、他者が行つた術も違和感を感じたりと結界が張つてあるかどうかが感覚的に分かるようになる。ただ、術者が己以外を排除する種類の結界を張つているなら、その場所は違和感どころではなく、前に進もうと思つても進めない程の圧力がある。ここまで何の違和感もなしに進めたから結界が張つてあるといつのは考え難いけど、もしかしたら・

「・・・私たちが島に入つてから結界を張つたのかも・・・出られなくするため・・・」

「私もそれは考えたわ。でもそれだと、どうやって私たちが島に入った時が分かつたのかしら」

私が、ユリナの考えに疑問を持つと、

「あのう、我々の砲撃音のせいではないでしょうか・・・」
と、現在私たちの班員である男性の1人がおずおずと言いました。
ああ、そういうば・・・

「そうだよねー。おじさんたちが有無を言わさず攻撃してきたもんね」

若干からかいの口調でアリナが答えた。

「ええまあ、あれはなんと言いますか・・・」

申し訳なさそうに男性が答える。

「そうですね。あの時結構大きな音がしましたね。いくらこの島が広いと言つても音が響いたかもしませんね。ただ、あれはもう気になさらずとも良いのではないですか?結果的に皆無傷でしたし、やむを得ない事情がおありになつたでしようから。」

私が悪気なく微笑みながらそう言つと、

「はあ、そう言つてもらえると助かります。」

と男性が言つた。

「結局、おじさんたちのほうが被害が大きかつたしねー。」

言わなくてもいいことをアリナが言つた。

「ええ、貴女とそしてあの少年に完膚無きまでにやられました・・・

」

男性が私を見ながら言つた。いや、あの少年はともかく私はただ砲弾を防いだだけなのですが・・・

「ま、まあ終わったことは気にせずにつ

アリナが慌てたように言つた。

「・・・でもあの子強かつた・・・」

ユリナが思いだしたように言つた。

「確かにそうだよねー。あれで私たちと一つしか違わないっていうんだから・・・」

若干へこんだようにアリナが言つ。そこで私は、

「アリナちゃん、ユリナちゃん。人は人、自分は自分です。あの少年は確かに強いですが、貴女たちは気にせず自分の腕を磨いてください。もちろん私もまだまだ修行不足の身ですが。」

とりなすように一人へ言つた。

「そうか、そうだよね師匠。修行頑張る!」

「・・・私も頑張る・・・」

と、男性が

「あれで修行不足と言われたら・・・」

「戦いが本業でないとはいえ我々は・・・」

二人して頃垂れていた。

「まあねー。でもそれはしようがないんじゃないかな。師匠の強さは化け物じみてるからね。だからこんなに美人なのに普通の男が怖がつて恋人の一人もいないんだよねー。」

と、アリナが言つてくれやがつたので私は

「アリナちゃん？あとでお話があるのでぞいいかしら？」

アリナへ微笑みながら言つた。

「ヒイツ。『』、『』、ごめんなさい師匠。」

何故かアリナが私の方を見て怯えていた。

「まあ、ユリナちゃんも元気になつたことだしそろそろ休憩を終えましようか？」

「「「「ハイツ！」」」

私がそう言つと全員が一斉に返事をした。何故？

立ち上がり、また荒れ果てた道を進もうとしたその時、突風が吹いた。

（）

リシナ達から約1？離れた場所に1人の男が立つており、その男は目を細めながらリシナ達のほうを見ていた。

「大きな音がするんでわざわざここまで様子を見にきてみれば、1、2、・・・5人か。久しぶりの客だ。精々もてなしてやるとするか。

」

そう言つて男はリシナ達のほうへ向けて飛ぶような凄まじい早さで飛んだ。

（）

一瞬巻き起こつた突風でよろけて目を瞑つていた私が目を開けたらいきなり目の前に見知らぬ男が立つていた。

赤い髪の体が大きく屈強そうなその男は私たち全員を見ると、

「よつこそ火喰い島へ、侵入者よ。歓迎するが。」

と言つた。この口ぶりだと「この住民でしょつね。

ただ、そんなことよりも・・・「ん?どうした侵入者どもよ。珍しいものを見るような顔をして?」

その赤い髪の男はそう言つた。それはそうだろう。つい先ほどまでも気配すら感じなかつたし、その男の額には・・・

「ああ、ひょっとしてこの角が珍しいのか?」

と、男は自らの額にある角らしきものを指してそう言つた。

「亜人・・・?」

アリナがそう言つと、

「はつ!人間つてのはどいつもこいつも同じ反応をするな。確かに俺たちは貴様らからすれば亜人と呼ばれる存在だろつよ。いや、何十年か前の侵入者は鬼とか呼んでいたつけなあ。」

男は私たちを蔑むように見ながらそう言つた。

「何十年か前?といつことはやはり以前にも誰かこの島、火喰い島と言つたかしら、に來ていたと言つわけね・・・」

私がそつと、男は

「ああ、来てたぜ。もつとも、骨すら残つちゃいないがな。」

と言つた。

その言葉に全員が警戒し、身構えた。さうして

「まあ、その時の奴等の目的が亜人を捕まえて売り飛ばすとかいうふざけたものだったからな。何の躊躇いもなく消してやつた。どうせ貴様らもそんなところだらう?」

男が言つと、レビュアスの男性の1人が、

「違つて!我々の目的は神獣だつて!この島に神獣の居る可能性が高いのでやつて来ただけだつ!」

慌てたよつとそつ言つた。すると、

「なんだとつ?成程な。どうやつてアレの存在を嗅ぎ付けたかは知らんが尚更生かして帰すわけにはいかなくなつたな。」

そつ言つと、男は両手を前に突き出した。

「アレ?といふことは、この島には神獣が居るん

レビュアスの男性がそこまで言つたといひで、數十秒後に吹き飛んだ。

「えつ・・・?」

それを見た全員が驚きで固まつてゐる。

「ふん、脆弱だな。」

男がそう言つと、アリナが
「な、何今い？」

と言つた。男は、合点したよつて

「ああ。 そういうやうだな。 人間たちの中では廃れたらしいが今のが魔法つてやつだ。 僕は親切だからな。 自分がどういう風に死ぬのかぐらいは教えといてやるよ」

私たちへ説明した。今、有無を言わさず吹っ飛ばしたけど・・・
「魔法？ 廃れた？ その言い方だと人間でも以前は魔法を使ってたみたいね？」

私がそう言ひと、

「ああ、 そうだ。 今もその名残があるじゃないか。 人間の村に張つてある結界とかな。」

「結界？ あれを魔法といつの？ 昔に妖術師と呼ばれる人たちが使つた術を？」

「呼び方は知らん。 だが250年ぐらい前に来た奴等は確かに強力な魔法を使つていたぞ。」

「250年前？ その時に誰か来ていたの？ それに貴方はいつたい何歳なの？」

「俺はまだ精々300歳ぐらいだが。 誰が来ていたかは貴様らのほうがよく知つてるんじゃないか？」

「つー・スサノオ。といづことは・・・」

「まあ、そんなことはどうでもいい。貴様らは消すだけだからな。」

「待つて、まだ聞きたいことが。」

「お喋りはここまでだ。どうせ貴様らはここで消える。あと、最後に教えてやろう。俺の名はロナン・サタク。火喰い島かみつきじま4柱あしらが1人口ナン・サタクだ。この名を頭に刻み込んで・・・死ねつ！」

男が再び両手を前に突き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1121y/>

剣盗りモノガタリ

2011年11月23日13時50分発行